

学 位 論 文

題 目 会話における理由疑問文の形式と行為：  
話題管理への相互行為言語学的アプローチ

指導教員 横森 大輔 准教授

令和 8 年 1 月 9 日

京都大学大学院人間・環境学研究科  
修士課程 人間・環境学 専攻

氏名 李 思萌

# 論文内容の要旨

人間・環境学 専攻 氏名 李 思萌

本論文は、日常会話における理由疑問文が、どのような相互行為実践に用いられているのかを記述することを目的とする。従来の研究では、理由疑問文の「説明要求」と「合理性への疑い」の機能が指摘されてきた。しかし、理由疑問文の機能の記述がこうした二つの側面に集約される一方で、やや固定的に捉えられる傾向も見られる。このように、理由疑問文の機能をその典型的な使い方に限って想定するだけでは、人々が実際の会話の中で理由疑問文をどのように用いているのかを十分に捉えることは難しい。そのため、理由疑問文が産出される際の具体的な相互行為環境に着目し、それがどのような相互行為実践に用いられているのかを詳細に検討する必要がある。

本研究は、理由疑問文が話題管理に関わる二つの相互行為実践に用いられていることを明らかにした。一つ目は、理由疑問文が、相手が端的に持ち出した新話題に対して、その詳細な展開を強く要請するために用いられる場合である。二つ目は、直前のやりとりの中に、相互行為上の積み残しが残ったまま話題が終結する局面において、理由疑問文が直前の話題との連続性を保ちつつ、新たな話題へと移行するために用いられる場面である。

また、この二つの相互行為実践に対応して、理由疑問文の二つの発話フォーマットが体系的に使い分けられていることも明らかになった。前者では、「なんで？」のように命題内容を伴わない形式が用いられ、後者では、「なんで+命題内容？」という形式が用いられる。

以上の分析から、理由疑問文の意味や機能は、言語形式に固有のものではなく、会話参加者が相互行為上の課題に対処する実践の中で具体化されるものであることが示された。さらに本研究は、相互行為実践の違いに応じて、理由疑問文の発話フォーマットが体系的に使い分けられていることを明らかにした。文法は、固定的な意味や機能を備えた抽象的な体系というよりも、人々が相互行為の中で繰り返し用いられてきた実践の積み重ねとして記述しうることを示唆している。

会話における理由疑問文の形式と行為：

話題管理への相互行為言語学的アプローチ

李 思萌

# 目次

|                                            |    |
|--------------------------------------------|----|
| 1. 序論 .....                                | 1  |
| 1.1. はじめに .....                            | 1  |
| 1.2. 本論文の構成 .....                          | 5  |
| 2. 理由疑問文の発話機能に関する研究背景 .....                | 6  |
| 2.1. 語用論のアプローチ .....                       | 6  |
| 2.2. 哲学・社会学のアプローチ .....                    | 7  |
| 2.3. 会話分析のアプローチ .....                      | 8  |
| 2.4. リサーチクエスション .....                      | 14 |
| 3. 方法論とデータ .....                           | 16 |
| 3.1. 方法論 .....                             | 16 |
| 3.2. データ .....                             | 18 |
| 4. 分析：話題の切れ目において会話を進行させるための実践 .....        | 20 |
| 4.1. 相互行為実践 1：端的に提示された新話題の詳細を要請する .....    | 20 |
| 4.1.1. 話題の詳細が展開できたケース .....                | 20 |
| 4.1.2. 話題の詳細が展開できなかったケース .....             | 27 |
| 4.2. 相互行為実践 2：相互行為上の積み残しへの対処としての話題移行 ..... | 33 |
| 4.2.1. 会話参加者間の意見が明らかに対立しているケース .....       | 34 |
| 4.2.2. 会話参加者間で明確な結論が出ないケース .....           | 40 |
| 5. 考察 .....                                | 46 |
| 6. おわりに .....                              | 49 |
| 6.1. 本研究のまとめ .....                         | 49 |

|                         |    |
|-------------------------|----|
| 6.2. 今後の課題 .....        | 50 |
| 参考文献 .....              | 51 |
| 付録 本文中で用いたデータ転記記号 ..... | 54 |
| 謝辞 .....                | 55 |

# 1. 序論

## 1.1. はじめに

日常会話において人々が用いる発話の意味や機能は、一定の程度において、その発話がどのような言語構造をもつかという点に依拠して理解されている。たとえば、疑問詞疑問文という形式が用いられ、上昇音調で発話がなされれば、典型的には、疑問詞の部分の情報を求める発話として理解されるが多い。このような、文脈を越えて繰り返し現れる典型的なパターンがあるからこそ、私たちは自らの発話を産出し、他人の発話を理解できる。この意味で、発話の言語形式は、相互行為の中で「今、何が行われているのか」を参加者が理解するための重要な手がかりとなっている。

しかし、発話の意味や機能は、言語形式のみによって決まるとは限らない。疑問詞疑問文の中でも理由疑問文<sup>1</sup>は、その典型的な機能が、他の疑問詞疑問文のように、単に出来事に関する情報を求めることにとどまらない。説明を求めるとき、その出来事が常識に合わず、不適切あるいは不当な可能性があるという認識が背景にあるため、理由疑問文は、当該行為や出来事の合理性・妥当性も同時に疑っている (Bolden and Robinson, 2011; Raymond and Stivers, 2016)。この点において、理由疑問文は他の疑問詞疑問文とは異なる性質をもっていると言える。例えば、Bolden and Robinson (2011) で挙げられている、以下の事例 (1) を見てみよう。事例 (1) において、理由疑問文の受け手である Ron は、この理由疑問文を、理由を求めるものとして扱い、実際に説明を与えるのと同時に、相手が自分の行為を不適切なものを見なしているという理解も示している。

### 【事例 (1)】 (Bolden and Robinson 2011: 102 より引用)

01 RON We did o:pen (.) thuh ba:g though with all thuh=hhhhh- uh-  
02 well with all your clo:thes.  
03 (0.4)  
04 CAT [.hh]  
05 RON [.hh]hh[h ]  
06 CAT [Wh]at. nah- eh- nah- you didn't bo:mb (1.0) thuh  
07 clo:thes=  
08 RON =°u- u-° We di:d.  
09 CAT **Why: . =**  
10 RON =Because thuh risk was too big that the:re <might be fleas>  
11 in there. you know, an' .hhhhhhhhhhhhhh- h- an' after all

---

<sup>1</sup> 本研究で言う「理由疑問文」というのは、言語形式の名前であり、典型的に、少なくとも字義的には、理由を尋ねる言語標識（例えば、「なんで」「どうして」など）を用いた疑問文を指している。行為として「理由を尋ねる」ことを成している疑問文、というような意味で使ってはいない。

12           that-=I mean y-=you didn't see it. (.) any of it. y'=know  
13           an' [just th]uh thought.  
14 CAT           [Ye:ah. ]

事例 (1) は、ルームメイトである Ron と Catherine との電話会話である。背景として、Catherine の不在中、Ron はノミの大量発生に対処していた。01～02 行目で Ron は、Catherine の服をノミ駆除用の薬剤にさらした、という悪い知らせを伝える。それに対し Catherine は、Ron が本当にそんなことをしたのかどうかについて、否定疑問文の形で確認を求めることで、不信感を示す (06～07 行目)。Ron が「やった」と認めたあと (08 行目)、Catherine は強い音調の “Why (なんで)” によって、Ron の行為に対する説明を直接求める (09 行目)。Ron はこの理由疑問文を、理由を求めるものとして扱い、実際に説明を与えるのと同時に、Catherine が自分の行為を「不適切なもの」「不当なもの」と見なしているというスタンスの表明としても理解している。その証拠に、Ron は、単に理由を述べるだけでなく、自分の行為を正当化する形で応答を組み立てている。まず Ron は、“Because thuh risk was too big that the:re <might be fleas> in there. (中にノミがいるリスクが大きすぎたからだ。)” (10～11 行目) というもっともな理由を提示する。その後、Ron の返事は単に情報として理由を伝えることにとどまらず、自分の行為を擁護するように組み立てられている。“I mean y-=you didn't see it. (.) any of it. (君はそれを見ていない。何もかも。)” と述べることによって (12 行目)、Ron は、Catherine には当時の状況の深刻さを判断するための十分な権限がなかったことを指摘し、自分の行為を擁護する。また、ここ “it (それ)” を “any of it (何もかも)” と言い直すことで、Ron は自分の弁明をさらに強めている。

このように、理由疑問文による発話は、理由に関する情報を求める問いとしても、相手の行為の合理性に疑義を差し向ける発話としても理解可能であるという、両義的な性質を備えている。このような両義性ゆえに、理由疑問文はしばしば、相手を責めている、非難している、あるいは問い詰めているかのように受け取られ、しばしば不平、批判、非難といった非同調的な行為と結びついて現れ (Bolden and Robinson, 2011; Robinson and Bolden, 2010)、人間関係上の緊張や摩擦を生みうるリスクを含んでいる (Raymond and Stivers, 2016) と考えられる。しかし、そのようなリスクがあるにもかかわらず、理由疑問文は人々の日常会話において、実践的に用いられているのである。ここで本研究が関心をもつのは、人々が理由疑問文を、「情報要求」と「合理性への疑い」という二つの側面のあいだに生じる張り合いを抱えながらも、実際の会話の中でどのように用いているのかという点にある。

この点を考える上で、理由疑問文の機能を、情報要求と合理性への疑いといった、典

型的な機能にあらかじめ限定して捉えては、理由疑問文の使用の実態を説明しきれない場合がある。例えば、以下の事例（2）を見てみよう。事例（2）の10行目の理由疑問文発話は、情報要求としても、合理性を疑う行為としても説明しきれない現象である。

【事例（2）】 CEJC T015\_010 04:20～

- 01 高畑 (普通)(.) ビールごちそうするから召し上がってってください(よ)  
02 小川 [え:?] [>いやいや<.]  
03 高畑 [(絶) [対)=だってこれ]置くとさ:,  
04 小川 うん.  
05 高畑 おいしくなく[なるよ?  
06 小川 [だけど:,  
07 (0.2)  
08 小川 ↑まだだって仕事しなくちゃいけないもん.  
09 (0.2)  
10 高畑 **なんで? e[he]He**  
11 小川 [ん.]  
12 小川 [he hehe いや-]  
13 高畑 [↑太(h)丈(h)夫(h)だよ]任[せちゃ(h)え(h)ば[hh .hh  
14 小川 [で,ちよつ(h) [↑ちよつとあの:それで:,  
15 いくつか聞きたい-お話し聞き[たいことがあるんで.  
16 高畑 [あ,いいですよ.  
17 =だからその間に召し上がってよ.

事例（2）は、小川が商店街のフリーペーパーの取材のために、飲食店の店主である高畑を訪れ、料理の写真撮影を終えた直後の場面である。断片冒頭の直前で、小川はカメラを下ろして机に置いたところであり、それを受けて高畑は、撮影に用いた料理をそのまま「召し上がって」ほしいと勧めている（01行目）。これに対し小川は一度それを断るが（02行目）、高畑は「これ置くとおいしくなくなるよ」という理由で説得を続ける（03、05行目）。さらに、小川が「まだ仕事しなくちゃいけない」と述べて再度高畑の説得を断ると（06行目）、高畑は10行目で「なんで?」と発話する。この10行目の「なんで」が分析において注目する発話（以下ではターゲットラインと呼ぶ）である。ここで、10行目の理由疑問文による発話は、理由説明を求めているにも見えず、小川の先行発話の合理性を真剣に疑っているようにも見えない。まず、10行目の理由疑問文による発話は、小川から理由の説明を引き出すためのものには見えない。なぜなら、高畑は10行目の発話を発した後、小川による説明がまだ始まってもない段階で、「大丈夫だよ、任せちゃえば」と再び説得を続けている（13行目）。つまり、高畑は、小川の原因説明を待つことなく、説得することに戻っているのである。聞き手の小川の反応から

も、この「なんで」が理由説明を強く求める発話として理解されていないことが分かる。小川はまず笑いで応じた後、12行目の「いや」のように発話を始めかけるものの、それが高畑の13行目の説得と重なったあと、小川が続けて理由を説明することはせず、高畑の説得に対処することへと移行している（14、15行目）。また、合理性を真剣に疑っていない点について、高畑の「なんで」は笑いを伴って産出され、その後も笑いを交えた説得が続いている（13行目）ことから、高畑は10行目の発話を、小川を非難したり、その合理性を強く問い詰めたりする行為として組み立てはしない。小川が12行目において、高畑の10行目の笑いに対して、笑いを返すことによって、高畑の発話が笑っていい（laughable）ものであることに対し理解を示す。この反応からも、受け手の小川が10行目の発話を、自分の合理性を強く問い詰める行為として理解してはしないことが分かる。

このように、理由疑問文という言語形式がどのような機能があるかについて一般化することは、言語形式の機能に関する記述を収束しまとめる上で有用である一方で、発話の意味や働きを、理由疑問文という言語形式自体に結びつけて記述することになりやすく、人々の実際の言語使用のあり方を捉えきれない時もある。

では、理由疑問文が実際の会話の中でどのように用いられているのかを考えるにあたり、発話の言語形式とその機能との関係をどのように捉えればよいのだろうか。これまで見てきたように、理由疑問文の発話機能を、言語形式の典型的な機能だけでは捉えきれない場合が見られる。このことは、発話の機能を、発話が置かれる文脈との関係の中で捉える必要があることを示している。この点について、Schegloff (2007) が指摘するように、会話の中で産出される発話は、常にそれが置かれた相互行為の文脈との関係において理解されるものである。また、言語形式は、単に個人の内的な認知能力を支える装置として存在するのではなく、参加者が「今ここで何が行われているのか」「このやりとりはどこに向かっているのか」を互いに理解し合うための、実践的な資源として機能しているのである（横森, 2018: 69）。

本研究はこのような立場に基づき、理由疑問文を、あらかじめ固定的な意味や機能を持つ表現としてではなく、人々が相互行為の中で直面する具体的な課題に対処するために用いられる言語的資源として捉える。そして、日本語日常会話のデータをもとに、理由疑問文という言語形式が、実際の会話の中でどのような相互行為実践に用いられているのかを記述することを目的とする。とりわけ本研究では、収集した事例の中で顕著に見られた、話題管理（topic management）に関わる二つの相互行為実践に注目し、それぞれにおいて理由疑問文がどのような働きをしているのかを明らかにする。また、その際には、理由疑問文の発話フォーマットと、それが用いられる相互行為実践との相関についても、相互行為言語学（Interactional Linguistics）の観点から考察を加える。

## 1.2. 本論文の構成

本論文の構成は以下の通りである。第 2 章では、本研究の研究背景として、理由疑問文をめぐる先行研究を整理し、本研究の位置づけを明らかにする。具体的には、2.1 節で語用論的アプローチからの先行研究を概観し、2.2 節で哲学・社会的アプローチによる議論を整理する。続く 2.3 節では、会話分析の立場から理由疑問文を扱った先行研究を検討し、2.4 節で本研究のリサーチクエスチョンを提示する。第 3 章では、本研究の方法論とデータについて説明する。3.1 節では、本研究の方法論と分析手順を示し、3.2 節では分析に用いるデータについて紹介する。第 4 章では、本研究の主要な分析結果を提示する。ここでは、理由疑問文が話題管理に関わる 2 つの相互行為実践に用いられていることを示し、それぞれを 4.1 節および 4.2 節で詳述する。第 5 章では、第 4 章で明らかにした 2 つの相互行為実践について考察を行う。最後に第 6 章では、本研究のまとめを行い、今後の課題について述べる。

## 2. 理由疑問文の発話機能に関する研究背景

2 節では、本研究の研究対象である理由疑問文について、先行研究で明らかになった理由疑問文の発話機能を概観し、残された課題をまとめた上で、本研究の位置づけを明らかにしていく。

### 2.1. 語用論のアプローチ

日本語の理由疑問文による発話の働き・機能について、語用論の研究においては、主に（1）理由疑問文による発話の非難や批判的な意味がどのように生じているか、（2）非難の意味を表す際、他の形式ではなく、理由疑問文を使う動機付け、（3）非難の意味と、理由の回答要求としての意味との共存、が論じられている。

まず、理由疑問文による発話の、非難という語用論的含意がどのように生じるかについて、理由疑問文は、当該事態を理解・受容できないことを示す「受容拒絶」を表す点に特徴があるとされている（加藤, 2015）。また、疑問文形式だけでなく、命題内容における動詞の使用も関与しているとされる。例えば、「なんで+動詞基本形+の」という構文では、動詞のタ形ではなく、あえて時制を違反し、基本形を使うことで、出来事の時制が背景化され、当該行為が一般化される。その結果、行為に対する話し手の発話時点での認識が前面に押し出され、疑問文形式と相まって非難の心的態度の表明に寄与するとされている（楊, 2023）。

また、なぜ話し手が理由疑問文で非難の意味を表すのかについての議論もなされてきた（馬, 2017）。疑問文の形式は、聞き手に、その疑問文に対する合理的な理由や説明を与え、その疑問文に含まれた慣習的前提<sup>2</sup>を否定する余地を与えることができ、それによって、非難の推意を取り消すことが可能になるとされている。

さらに、理由疑問文が非難として理解される際にも、理由の回答要求という機能が同時に保持されている点も明らかにされてきた。例えば、「何、寝てるんだよ？」と「なんで寝てるんだよ？」を比較すると、前者は受容拒絶の意味に強く傾き、理由の回答要求として解釈されにくいのに対し、後者はまだ疑問としての機能を残しており、前者と比べると相対的に批判・非難の意味合いが弱いことが指摘されている（加藤, 2015: 49）。馬（2017）も、理由疑問文の形式を使うことは、非難の意味を表すのと同時に、疑問詞に対応した情報を求めることもできると指摘している。

以上より、語用論の研究では、日本語の理由疑問文について、その非難や批判的な語用論的含意がどのように生じるのかを、推意や慣習的前提、文形式や動詞形の特徴とい

---

<sup>2</sup> 慣習的前提：「～べきではない」という一般常識に関する知識であり、世界知識に含まれる（馬, 2017: 114）。

った観点から説明してきた。また、一方で、先行研究においても指摘されているように、理由疑問文による非難的用法は、理由の回答要求としての機能を完全には失っておらず、疑問として理解される余地をまだ含んでいる。しかし、このように複数の解釈可能性を含む発話が、実際の会話の中でどのように理解され、後続の相互行為にどのような影響を与えるのかについては、十分に検討されてきたとは言い難い。

## 2.2. 哲学・社会学のアプローチ

本節では、理由疑問文に関わる知見を整理するために、哲学・社会学における「説明 (account)」に関する研究を取り上げる。この分野の研究は、特定の言語形式を精緻に分析することを目的としているわけではないものの、社会生活において、理由疑問文による発話がどのような機能を果たすのか、すなわち理由疑問文による発話とその機能についての言及があったという点で、理由疑問文の機能を考える上で重要な視座を提供している。

哲学・社会学の研究では、社会生活において、説明 (account) を与えることに関する議論の中で、理由疑問文による発話が、しばしば説明を引き出す「直接的な説明要求 (direct account solicitation)」として機能することについて言及している。これらの研究では、説明を与えることを「社会的規範からの逸脱に対する対処」とし、その種類 (McLaughlin et al., 1983; Scott and Lyman, 1968) や理論的な機能 (Schonbach, 1990) を論じている。特に McLaughlin et al. (1983) では、“Now why haven’t you been filling these out with the truth? (どうして正直に書いてこなかったの?)” のように、理由疑問文による発話がしばしば説明を引き出す直接的な説明要求として機能することにも言及している。

もっとも、これらの研究の関心は、説明を引き出す発話よりも、説明を与えることの社会的意味や機能に置かれており、理由疑問文のような特定の言語形式による、直接的な説明要求について詳細に検討することを主な目的としているわけではない。しかしながら、説明が社会的規範からの逸脱への対処として位置づけられている点は、理由疑問文がしばしば非難や批判的な意味を帯びて理解されるという語用論の知見と一致していると考えられる。

また、これらの研究において、概念的・理論的な整理を通じて、説明を与えるという行為の社会的意味を論じるのが多く見られ、用いられる事例も、あらかじめ設定された理論的枠組みや仮説を説明・検証するためのものとして位置づけられることが多く、事例そのものを出発点として分析が組み立てられているわけではない。その意味で、これらの研究は、発話の形式と機能の関係に言及してはいるものの、トップダウン的に捉え

る傾向があり、個別の会話場面における相互行為の展開を直接的に分析するものではないと言える。こうした理論的整理を踏まえつつ、実際の会話の中で理由疑問文がどのように用いられ、どのように理解されているのかを明らかにするためには、理論や仮説を先行させるのではなく、実際の相互行為データに基づく、ボトムアップ的なアプローチが必要となると考えられる。

### 2.3. 会話分析のアプローチ

前節までに見てきたように、語用論および哲学・社会学の研究では、理由疑問文が非難や説明要求といった行為と密接に関わることが指摘されてきた。しかし、これらの研究では、理由疑問文の働きは二つの側面に集約され、この二つが理由疑問文の意味としてやや固定化された形で扱われてきたと言える。例えば、理由疑問文は非難として理解されるのか、それとも説明要求として理解されるのかといったように、発話の機能を二者択一的に整理する見方や、あるいは、発話がもつと想定される機能を前提として事例を位置づける見方が見られた。

このような、トップダウン的なアプローチに対して、発話の機能や行為をあらかじめラベル付けるのではなく、実際の会話データに即して、発話がどのように理解され、どのような応答を可能にしているのかを記述する経験的な研究として、会話分析 (Conversation Analysis: CA) による研究がある。会話分析では、発話の成している行為は、話し手の意図や発話の文法形式だけで決まるものではなく、発話が置かれた相互行為環境や、その後続く参加者の振る舞いとの関係の中で達成されるものとして捉えられる。このような立場から見ると、理由疑問文は、非難か説明要求かといったいずれか一方の機能をもつものとして捉えられるべきではなく、実際の相互行為の中で、参加者がどのような行為として扱っているのかを問うべき対象であると言える。とりわけ、理由疑問文が、非難的に理解されうる一方で、理由の説明を引き出す可能性も保持しているという点は、先行研究において繰り返し指摘されてきたものの、それが具体的な会話の展開の中でどのように処理されているのかについては、なお十分に明らかにされていない。

このような会話分析の研究においては、相互行為の中でどのような発話が「説明 (account)」という行為を可能にするのか、すなわち「説明要求 (account solicitation)」がどのような方法で行われるのかが議論されてきた。この枠組みの中で、理由疑問文は、説明要求を明示的に行うための発話形式として位置づけられている。一方で、会話分析の研究では、説明要求が必ずしも理由疑問文という明示的な形式によって行われるとは限らず、より暗示的な方法によっても達成されることが繰り返し示

されてきた。本節では、まず理由疑問文による明示的な説明要求に関する研究を整理した上で、それらを会話分析による研究全体の中に位置づけるために、暗示的な説明要求に関する研究についても概観する。

理由疑問文による明示的な説明要求に関する研究としては、Bolden and Robinson (2011) および Robinson and Bolden (2010) が挙げられる。Bolden and Robinson (2011) は、それまでの先行研究において、理由疑問文の成す行為は、単純な説明要求か、批判・非難・挑戦などの非同調的な行為のどちらかという二分的な理解が暗黙的に存在していたと指摘した。そして、そうした二項対立的な見方を超え、理由疑問文による説明要求がすべて二面性 (Janus-faced) をもつことを主張する。すなわち、理由疑問文は一方で、話し手と聞き手の間に認識的なギャップ (epistemic gap) が存在することを示し、説明を求める可能性を開くが、他方では、当該出来事が常識に照らして理解しにくい、あるいは不適切であるという前提を含み、挑戦的なスタンスを同時に伝える。この挑戦的なスタンスは、理由疑問文による発話の発話デザインによって強められたり、和らげられたりできることが示されている。例えば、ターン構成単位 (turn-constructive unit: TCU) を拡張し、拡張の部分において、話し手自身の認識的アクセスの乏しさを示したり、相手の優位な認識的立場を認めたりすることで、挑戦的なスタンスを緩和するやり方がある。例えば、以下の事例 (3) が挙げられている。

【事例 (3)】 (Bolden and Robinson 2011: 109 より引用)

```
01 MOE      .hh An' you should buy a pla:ne ticket,
02 MOE      .h[hh ] Uh[: [: ]
03 ART      [.hh] [W- [Wh]y do I have tuh leave. that's what I don't
04           understa:nd.
05 MOE      °m°=Bee- °m- m-° because they've never met you. they have
06           tuh meet you: .hhh a:n' duh[: ]
07 ART      [Ah]:. . ((a version of Oh))
08           (0.3)
09 MOE      But >(en you know)< (they=ess gunna) see you on video so they
10           might be able tuh pro:cess it before you co:me b[ut ]
11 ART      [ Ri]:ght.
12 MOE      .hhhhh >I don' know< they're a little:: they- they jus'
13           kinda like wait 'till thuh last minute type a pe:ople.
```

事例 (3) の背景として、MOE は現在日本に住み、英語を教えている。一方、友人の ART は現在アメリカに住んでいるが、同じような仕事に就くために日本へ移住する予定である。MOE は、その渡航の準備について ART に助言をしている。就労ビザを取得す

るために、MOE は ART に「帰国用の航空券も買っておいたほうがいい」と勧める（01 行目）。ここで、03 行目で ART の理由疑問文 “Why do I have tuh leave. (なんで出国しなきゃいけないの)” は、MOE の「往復チケットを買え」という助言に対し、挑戦的なスタンスを示し、ひいてはそれを拒否する可能性を含んだ発話になっている。しかし、ここで重要なのは、ART がこの発話の後に、“that’s what I don’t understa:nd. (そこがよく分からないんだ)”（03、04 行目）と付け加えて発話順番を拡張している点である。ART はここで、就労規則についての自分の知識が十分ではないことを明示することで、説明要求に含まれる挑戦的なスタンスを和らげている。つまり ART は、「その行為は普通はおかしい」という立場（理由疑問文がもともと持つ含意）から、「少なくとも自分には、その行為の意味が分からない」という立場へと、スタンスをずらしているのである。実際、これに対して MOE は、“because they’ve never met you. they have tuh meet you: (向こうの会社は君にまだ会ったことがないからだ)”と比較的中立的に説明している（05、06 行目）。その反応に対し、ART も、引き延ばした形の “Ah::” を発話することで、MOE の説明を暗に受け入れる（07 行目）。この “Ah::” は、「知らなかった状態」から「分かった状態」への認識の変化を表すものであり、ART の 03 行目の理由疑問文が、誤った（あるいは別の）前提に基づいて出されたものだった、ということを含意する形で、先ほどまでの挑戦的な意味合いをさらに引っ込めている。

一方で、説明を求める出来事をより否定的・誇張的に語り直すことによって、その挑戦的な意味合いを強化するやり方もある。このようにデザインされた理由疑問文は、文句や批判として理解されやすいことが示されている。Bolden and Robinson (2011) では、以下の事例（4）が挙げられている。

【事例（4）】（Bolden and Robinson 2011: 113-114 より引用）

01 RAE She should send <pictures> anyway.  
 02 CIN She wha:t? She sh[ould send? ]  
 03 RAE [ >I don’ know-< ] (.) I am not so sure maybe  
 04 but- Matsi’s like in a fight with \$her.\$ hh [heh]  
 05 CIN [ Oy] ve:y. Why:?  
 06 (0.5)  
 07 RAE Oy ve:y.Why::.(.)it’s oka:y.oy ve:[y.] ( )- ]  
 08 CIN [ W]hy doe]s ev’ryone have  
 09 tuh fi::ght.  
 10 CIN .hhhh  
 11 RAE (Doesn’)- (look i)- I KNO::W.  
 12 (.)  
 13 RAE Why does Matsi have=tuh fight with thuh whole wo:rld.

14 CIN Ri:gh[t.]

15 RAE [ I]:'m not in a fight ...

事例 (4) は、ユダヤ人女性の Rae と Cindy の電話会話である。04 行目で Rae は、第三者の Matsi が母親とケンカしている、という話を持ち出す。この話に対して、Cindy はまず、イディッシュ語の “Oy vey (ああもう、やれやれ)” という嘆きの表現を発し (05 行目)、続いて “Why? (なんで?)” と、Matsi が母親とケンカしていることについて説明を求める。これに対して Rae は、説明を与える代わりに、“Oy vey. Why::” と繰り返し (07 行目)、Cindy のうんざりしたスタンスに同調している。そのうえで Rae は、“it’s okay (大丈夫よ)” と述べ、問題の出来事をよくあることとしている。しかし Cindy は、Rae の「大したことない」というスタンスには同調せず、“Why does everyone have to fight (なんでみんな、いちいちケンカしなきゃいけないの)” と発話する (08 行目)。ここでは、もともとの説明対象だった出来事 (= Matsi が母親とケンカしていること) が、より否定的で誇張した言い方に言い換えられ、強化されている。つまり、“Matsi’s like in a fight (Matsi が母親とケンカしている)” が “ev’ryone have tuh fi::ght (みんながケンカしている)” に、“in a fight(ケンカしている)” が “have tuh fi::ght (ケンカしなければならない)” に言い換えられているのである。ここでの理由疑問文は、「説明を求める」行為としてではなく、「不満や苦情を言う」行為として産出され、理解されている。実際、Rae は “I KNOW (ほんとそう)” と応答している (11 行目)。これは、Cindy の発話を「答えるべき質問」ではなく、「同意すべき意見」として扱っていることを示している。また、Rae 自身も、“Why does Matsi have to fight with the whole world (なんで Matsi は世界中とケンカしなきゃいけないの)” のように (13 行目)、同じように否定的、誇張的に言い換えられた理由疑問文を用いて、苦情を言う。これに対する Cindy の “Right (その通り)” の反応 (14 行目) も、Rae の 13 行目の発話を「答えを求める問い」ではなく、「同意すべき主張」として扱っていることを示している。

また、Robinson and Bolden (2010) は、理由疑問文による明示的な説明要求が非同調的な (disaffiliative) 意味合いをもつ場合、それらが会話の中で遅延される (withheld) 傾向にあることを指摘し、理由疑問文による明示的な説明要求が非優先的な (dispreferred) 行為として扱われることを明らかにしている。このことについて、Robinson and Bolden (2010) は、本来なら説明要求が出てもよいはずの位置で、それが明示的なやり方で出されず、代わりに、ターン構成単位の完了可能点で何も言わないことによって沈黙が生じているという証拠を用いて説明している。例えば、以下の事例 (5) が挙げられている。

【事例 (5)】 (Robinson and Bolden 2010: 508-509 より引用)

01 ABB °An'-° An' Esther's inlaws are here now.  
 02 (0.5)  
 03 BON Oh right. I forgo:t.  
 04 ABB Mm=hm:,  
 05 BON [(Oh(h) ge(h)]e(h)  
 06 ABB [( )]  
 07 BON .hhh Are you having them for Sha:bbos?  
 08 ABB N:o:,  
 09 (.)  
 10 ABB °N:[o. ]°  
 11 BON [ **W**]hy not.  
 12 ABB .h[h↑No] because they're=they:'re↓[they're- (.) it's:]: she  
 13 BON [Hh=h=h] [Hhh uh -eh\* ]  
 14 ABB got, thuh Adler's apartment, an' you kno:w,↓...  
 \* ((cough))

事例 (5) は、ユダヤ人女性二人の電話会話である。01 行目で、Abby は Bonny に、親戚が訪ねてきていることを伝える。07 行目で Bonny は、それらの親戚を安息日（毎週金曜日の日没から始まるユダヤ教の安息日で、Bonny はこれを “Sha:bbos” と呼んでいる）に自宅へ招いているのかどうかを尋ねる。Bonny の極性疑問文（07 行目）は、文法的に、肯定の応答を優先する形で組み立てられており、社会文化的にも「遠くから来た家族を安息日に招くのが普通だ」という期待を体現していると考えられる。しかし Abby は “N:o:”（08 行目）と、否定の応答、すなわち非優先の応答を、即座に、しかも緩和や説明なしに返す。普通、非優先的な応答には、その応答を正当化する説明が伴うのが規範的なやり方であるため、ここで、聞き手である Bonny がその説明を明示的に求めてもよいはずである。しかし、Bonny は自分から聞くのを差し控え、09 行目のように、何も言わずに Abby が自ら説明を付け加えるのを待っている。その後、Abby が小さめの声で “No”（10 行目）を繰り返すことによって、これ以上話すことがなく、自分の応答が終わっていることを示す。ここで、Abby による説明が来ないことがようやく分かり、Bonny は “Why not”（11 行目）によって、はじめて明示的に説明を要求する。

Robinson and Bolden (2010) のこの知見と関連し、理由疑問文という明示的な言語形式を用いた説明要求は、思ったほど頻繁に用いられる形式でもないことも指摘されている。Stivers (2011) は、対面会話における質問タイプの分布を分析し、話し手が意見や決定、信念を表明する頻度に比べ、理由疑問文による説明要求の出現頻度が低いことを示している。つまり、会話において説明要求が行われる場合、それが必ずしも理由

疑問文のような明示的なやり方によって行われるわけではなく、暗示的なやり方で行われることも多いと示唆している。

実際、会話分析の研究では、理由疑問文を用いない、暗示的な説明要求のやり方に関する研究が数多く蓄積されてきた。Pomerantz (1980) は、“my side telling”と呼ばれる実践を示し、話し手が自身の持っている、限りのある知識を提示することで、それをより詳しく知っている相手に、その出来事についての説明を促す方法を明らかにしている。例えば、“Your line’s been busy (ずっと電話、話し中だったよ)”のように、自身の経験に基づく事実のみを提示する発話によって、“Yeah my father’s wife called me (あー、うちの父の奥さんが電話してきてて)”と、相手がある時どこで何をしていたのかという事情を説明するよう促す事例を報告している。また、Schegloff (1988) は、相手の何らかの否定的な出来事に気づいて言及する“noticing”の発話が、不満(complaint)として相互行為的に理解され、相手からの説明を引き出しうることを示している。例えば、“You didn’t get an ice cream sandwich (アイスクリームサンドを買ってこなかったね)”や“You forgot it (忘れたよね)”というような、相手の失敗したこと、できなかったことに言及することは、不満や苦情を言うための手段として使われる。Smith (2013) は、“I thought (～だと思っていた)”で始まる発話に着目し、これらの発話が、話し手自身の持っている事前の知識とのズレを指摘することで、そのズレに対する説明を相手に求める機能をもつことを明らかにしている。例えば、仕事がありませんことに対して不満をしている友人に、“I thought you were doing doubles all week (今週ずっとダブルで働いていると思っていた)”と返す例が挙げられた。この場合、不満をしていた友人が、“three of them got cancelled (3つのダブルがキャンセルになった)”と説明で返す。加えて、Raymond and Stivers (2016) は、たった今相手によって言われたこと、つまり、話し手自身がすでに答えが分かっていることについての確認要求(known-answer requests for confirmation)を分析し、このような確認要求が単なる確認ではなく、相手からの説明を期待していることを示している。具体的には、“Oh ye:ah. Gee the May Comp’ny are sure havin’a big sale (May Company がセールをやってる)”や“I don’t like:those:°stupid movies.° (そんなバカげた映画が好きじゃない)”、“Rick an’I are gonna go buy another package. (ほかのパッケージを買うつもりだ)”のように、まず一人の会話参加者が判断・評価・決定・行動を言明する。そのような言明に対し、もう一人の会話参加者が“Are they? (そうなの?)”や“Really? (ほんとに?)”、“Oh you have? (へえ、もう行ったの?)”のように、相手が言ったばかりのことについて確認を求めるといったようなやり方である。この場合、このような確認要求は、ただ相手からの確認をもらうだけでなく、そのことについて説明も期待し

ている。その証拠としては、このような確認要求に対し、聞き手がただ確認を与えるだけの場合、確認要求の話し手が、それを反応の不在として扱い、次のターンにおいて、はっきり説明を求める。

以上のように、会話分析の研究は、理由疑問文が持つ「説明要求」と「合理性への疑い」の機能が、常に両方とも会話参加者に認識し理解されることを明らかにしており、この点においては語用論、哲学や社会学の研究での知見とおおむね一致している。また、理由疑問文を、説明要求を行うための明示的な発話形式として位置づける一方で、説明要求という行為そのものが多様な方法によって達成されることも明らかにしており、行為と発話形式が一对一に対応するものではないと示唆している。

## 2.4. リサーチクエスチョン

以上の3つのアプローチの先行研究から、理由疑問文には「説明要求」と「合理性への疑い」の2つの機能があること、そしてこの2つの機能は単純に使い分けられるものではなく、人々は両方の側面を同時に認識し、理解していることが分かった。

一方で、従来の研究においては、特に理由疑問文がもつ「合理性を疑う」側面について、暗黙のうちに、非難や批評といった非同調的な行為と結びつけて理解される傾向があった。しかし、このような理解は、実際の会話における理由疑問文の用いられ方を十分に捉えているとは言いがたい。Bolden and Robinson (2011) が指摘しているように、理由疑問文の合理性を疑う側面は必ずしも会話参加者の関係を壊すものではなく、共感を示すのに用いられることもある。例えば、語り手が否定的に述べている幼児殺害事件に対し、挑戦的な態度を示すこと（“Why did she do th ↑ a: ↓ t”）が、語り手のスタンスに同調することができるという事例が挙げられている（Bolden and Robinson, 2011: 98）。また、Pomerantz (1984) は、相手の自己卑下に対しては、むしろ挑戦的な態度を示すことが規範的であることも示されている。つまりこれらの研究が、発話の機能を具体的な相互行為的文脈と結びつけて記述することの重要性と有用性について、大きな示唆を与えている。

しかし、理由疑問文の持つ機能を記述した従来の研究では、理由疑問文が実際の会話において、どのような相互行為的環境に埋め込まれ、参加者が直面する具体的な相互行為上の営みに対処する資源としてどのように用いられているのかについては、体系的な記述が十分には見られていない。そこで本研究は、前節で紹介した会話分析の立場をとり、理由疑問文という言語形式を、予め固定的な意味や機能をもつ表現としてではなく、人々が具体的な相互行為的環境の中で、具体的な相互行為上の課題に対処するために用いられる言語的資源として捉える。そして、理由疑問文が、人々によってどのよ

うな相互行為実践<sup>3</sup>の中で用いられているのかを記述することを目的とする。

---

<sup>3</sup> 実践 (practice) というのは、言語的（およびその他の）資源が、特定の相互行為上の課題（例えば、発話順番を構築すること、修復を開始することなど）のために繰り返し用いられ、パターン化されることを指す (Couper-Kuhlen and Selting, 2018; 横森, 2017)。

### 3. 方法論とデータ

#### 3.1. 方法論

以上の研究目的を踏まえ、本研究では、相互行為秩序の観点から理由疑問文の実際の使用を考察するために、会話分析の知見と方法論を用いる。

会話分析は、アメリカの社会学者 Harvey Sacks によって提唱された研究方法であり、日常会話において人々がどのような方法を用いて相互行為を組織化しているのかを、実際のやりとりに即して詳細に記述することを目的とする (Sacks, 1984)。会話分析の基本的な立場は、人々が社会生活を営む上で用いている実践的な方法を、研究者の理論的仮定をあらかじめ導入することなく、会話参加者自身の行為の組織化のあり方から明らかにする点にある。研究者は、会話参加者たちが实际的な目的を状況に即した仕方追求している様子を、自然に発生した会話データに基づいて観察・記述する (串田・平本・林, 2017: 22)。その際、一つ一つの発話を記述するにあたって、発話が単独で意味や機能をもつものとしてではなく、その場の状況との関係の中で、特定の行為として理解可能なものとして扱われる。具体的には、ある発話がどのような行為として認識可能になるのかは、それがなされる相互行為的環境に照らす。その発話によって構成された行為は、また新たな状況を生み出し、次の行為に対する期待を形成する。そして、その行為に対する相手の応答によって、当該発話がどのように理解されたのかが示される。すなわち、会話分析の観点においては、行為と状況とが絶え間なく相互に形作り合っているという前提が置かれる。

このように、会話分析は、会話という相互行為が秩序立って行われるために、人々が実際のやりとりの中で用いているさまざまな方法を記述することを目的とする研究手法である。そのため、言語形式それ自体は主たる研究対象ではないが、そういった相互行為を秩序立たせるための仕組みや手続きの、重要な要素の一つとして位置づけられてきた。こうした会話分析の知見や方法論を基盤とし、相互行為秩序の観点から言語研究を行う「相互行為言語学 (Interactional Linguistics)」という立場がある。相互行為言語学では、特定の言語形式に着目して、それが相互行為の中でどのような働きをしているのかを明らかにするか、あるいは、特定の相互行為上の働きに着目して、それがどのような言語形式によって達成されているのかを明らかにする (Fox et al., 2013)。つまり、言語形式の機能を、相互行為上のさまざまな営みにおいて、どのような意味合いや性格をもっているのかという観点から捉える研究の立場である。

このような会話分析、および相互行為言語学の視点は、本研究の目的と密接に対応している。繰り返しになるが、本研究は、理由疑問文の発話機能をあらかじめ「説明要求」や「合理性への疑い」と限定するのではなく、それらがどのような相互行為的環境の中

で立ち現れ、どのような行為として理解可能になっているのかをありのままに記述する立場をとる。そのため、理由疑問文による発話がどのような行為として機能しているのかは、当該発話が置かれている文脈と切り離しては捉えることができない。会話分析の方法を用いることで、理由疑問文による発話の機能を、相互行為的な文脈に即して記述することが可能となる。以上の理由から、本研究では会話分析を研究方法として採用する。

また、発話がどのような行為を遂行しているのかという点について、相互行為言語学の研究においては、発話のフォーマット<sup>4</sup>の重要性も示してきた（Curl and Drew, 2008; Couper-Kuhlen, 2014）。具体的には、ある発話のフォーマットが、特定の相互行為的環境ときわめて強い結びつきがあり、その結果、特定の行為を遂行するための表現として機能する場合がある。とりわけ Couper-Kuhlen (2014) は、「依頼」「申し出」「提案」「示唆」という4つの行為に用いられる多数の発話フォーマットを比較検討する中で、それらの発話フォーマットの中には、非常に特定の相互行為的環境と結びついており、その環境においてほぼ専用的に用いられるものが存在することを示している。すなわち、ある種の発話フォーマットは、特定の相互行為的環境の中で行われる特定の行為のための、定型的な言い方として機能していることを示している。そこで本研究では、2.4.節で述べたように、理由疑問文が用いられる相互行為実践を記述することを主たる目的とするが、分析対象となるデータの中に、理由疑問文の発話フォーマットに差異が見られる場合には、その差異が相互行為上の意味を持っているかどうか、それぞれの発話フォーマットが、特定の相互行為的实践を実現するための意味のある選択なのかについても考察する。

本研究の具体的な研究手順は次の通りである。まず、自然に発生した日常会話データを対象とし、その中から理由疑問文が用いられている発話を抽出する。次に、抽出した理由疑問文を含む発話（以下、ターゲットライン）の周辺を、音声および映像データを参照しながら詳細に書き起こし、分析用のデータ群を作成する。その後、各ターゲットラインが置かれている連鎖環境（sequential environment）（Schegloff, 2007）を参照し、理由疑問文がどのような相互行為環境において、どのような相互行為実践に用いられているかという観点から、データ群を分析し、グルーピングする。

---

<sup>4</sup> 本研究でいう発話のフォーマットとは、個々の発話の具体的な組み立てられ方（つまり、一つ一つの発話の具体的な発話デザイン）そのものを指すのではなく、複数の発話に共通して見られる、ある程度定型化した言語形式を指す。例えば、Couper-Kuhlen (2014) で議論された、“you can/could X”や“you should/ought to/have to/'d better X”のようなものである。これらの発話は、“X”の部分の具体的な内容は違えど、“you can/could”や“you should/ought to/have to/'d better”の部分においては、ある程度定型化した言語形式を共有する。

### 3.2. データ

本研究で用いるデータは、『日本語日常会話コーパス (Corpus of Everyday Japanese Conversation: 以下 CEJC)』（小磯他, 2023）に収録された会話データである。CEJC は、会話参加者の年齢層や関係性、会話場面の異なる多様な日本語日常会話を収録したコーパスであり、自然に発生した相互行為を分析するための資料として広く用いられている。

本研究では、CEJC に収録された会話のうち、特に二者間で行われている日常会話に着目してデータを収集した。二者間会話に限定することで、理由疑問文が向けられている相手や、その発話に対する応答との対応関係を明確に捉えることが可能となり、理由疑問文が相互行為の中でどのような行為として理解されているのかを、より精緻に記述することができると考えられる。このような理由から、本研究では二者間会話を分析対象とした。また、分析対象とする事例の選定にあたっては、理由疑問文が実際の相互行為の中で、他の会話参加者に対する質問として用いられている発話を抽出した。理由疑問文が発話全体の一つの文節として埋め込まれている場合（例えば、「なんでそんなことをしたのか、もう覚えていない」のような発話）は、分析対象から除外した。

このように CEJC から会話事例を収集した結果、30 の会話事例が得られた。これらの事例について上述の手順を踏まえて検討を行ったところ、話題管理に関わる相互行為実践に用いられる理由疑問文の事例が特に目を引いたため、本研究では、主にそれに関する 2 つのタイプについて説明を行う。各タイプにはそれぞれ 4 つの事例が含まれており、事例の内訳については表 1 にまとめた<sup>5</sup>。

---

<sup>5</sup> 残る 22 例のうち、3 例については、連鎖の第 1 成分 (First Pair Part: FPP) に対する応答として用いられており、当初は、FPP に対する受け入れ難さを示す用法である可能性を検討した。しかし、分析を進めるにつれて、これらの事例では、先行発話が必ずしも典型的な FPP ほど強い連鎖上の期待を持っているわけでもなく（例えば、冗談っぽい言い方を使う）、また、FPP に対して受け入れ難さを示していない事例もあり（例えば、プレゼントが提示された後に、会話参加者が「なんで?」と聞くが、それと同時にプレゼントの包装も開けている事例）、結果、このグループについてまとめた結論が出せなかった。そのため、これら 3 つの事例については、今回の論文では扱わないこととした。さらに、残る 19 例についても、特定の相互行為的環境にもとづいて、まとまりのあるタイプとしてさらにグルーピングすることができなかったため、本論では扱っていない。

| 第 4 章での<br>事例番号      | グルーピング                                  | 理由疑問文の<br>発話フォーマット | 参与者関係・<br>会話場面の特徴  |
|----------------------|-----------------------------------------|--------------------|--------------------|
| 事例 (6)<br>T010_002b  | 相互行為実践 1：<br>端的に提示された新話題の<br>詳細を要請する    | 「なんで？」単独           | 親子；<br>晩御飯しながらの雑談  |
| 事例 (7)<br>T009_017   |                                         |                    | 恋人同士；<br>散歩しながら雑談  |
| 事例 (8)<br>K001_008   |                                         |                    | 姉妹；<br>カフェでの雑談     |
| 事例 (9)<br>T010_009   |                                         |                    | 教授とゼミ生；<br>研究室での雑談 |
| 事例 (10)<br>T008_005a | 相互行為実践 2：<br>相互行為上の積み残しへの<br>対処としての話題移行 | 「なんで＋<br>命題内容？」    | 友人同士；<br>事務所での雑談   |
| 事例 (11)<br>K004_011  |                                         |                    | 親子；<br>ケーキを作りながら   |
| 事例 (12)<br>T010_002a |                                         |                    | 親子；<br>晩御飯しながらの雑談  |
| 事例 (13)<br>C002_008  |                                         |                    | 親子；<br>車を運転しながら    |

表 1\_データの内訳

## 4. 分析：話題の切れ目において会話を進行させるための実践

4 節では、理由疑問文による発話を、理由についての情報を求めるか相手の行為を疑うかといったように、あらかじめその発話の機能を二項対立で捉えるのではなく、相互行為の中で生じる課題に対処するために用いられると捉える。以下では、4.1 節と 4.2 節を通して、参加者が、今までの話題がひと段落ついたタイミングで、「次に何を話すか」「どのように会話を前に進めるか」という課題に直面する場面、すなわち話題の切れ目において、理由疑問文が次の展開を組織するために用いられていることを示す。

具体的に 4 節で扱うのは以下の内容になる。まず、4.1 節では、相手によって新しく持ち出された話題に対して、その話題に関心を示しつつ、詳細な展開を求めるために理由疑問文が用いられる場合を示す。次に、4.2 節では、直前の話題との関連を保ちながら、自ら新たな話題へと移行するために理由疑問文が用いられる場合である。前者の実践では、理由疑問文による発話が「なんで？」という発話フォーマットで用いられるのに対し、後者の実践では、「なんで+命題内容？」という発話フォーマットが用いられる。

### 4.1. 相互行為実践 1：端的に提示された新話題の詳細を要請する

4.1 節では、相手がある出来事や状況についてごく簡単に言及し、それ以上は詳しく語らないまま話題として提示する場面の事例を扱う。つまり「何かがあったらしい」とは分かるが、その中身はまだ語られていない、というような局面である。このような場面において、その出来事についての詳細をさらに引き出すために、理由疑問文が用いられている。この場合の理由疑問文は、話の方向を「その出来事の原因を説明する」という枠にゆるやかに定めつつも、どこからどのように話すかについては相手に委ねる形になっている。つまり、ここでの理由疑問文は、単に理由という情報を尋ねるためのものではなく、相手にその出来事について詳細に語ってもらうために機能している。

また、本節で扱う事例に共通して見られる重要な特徴は、理由疑問文が「なんで？」という、疑問文の命題内容を伴わない発話フォーマットで産出されている点である。

以下で、4.1.1 節では、理由疑問文に対して、受け手がその出来事について掘り下げようとする姿勢を示し、話題を詳細に展開していこうとすることに志向している事例を扱う。これに対して 4.1.2 節では、受け手は理由疑問文に答えるための最低限の情報は返すものの、話題をさらに掘り下げて展開しようとする様子は見せない事例を扱う。ただし、その後の会話参加者の振る舞いから、理由疑問文の話し手が、相手からより詳しい語りがなされることを期待していたことが分かる。

#### 4.1.1. 話題の詳細が展開できたケース

まず、前述の主張を、事例（6）を用いて説明する。事例（6）では、大学生の徹と母が晩御飯を食べながら雑談している。14行目において、理由疑問文の用いられた発話順番「(は/へ)::なんで?=周りにいいねってゆわれんのが?」<sup>6</sup>が産出されている。

【事例（6）】 CEJC T010\_002b 07:27～

- 01 (6.4)
- 02 徹 もう::, ((02行目から07行目まで徹はずっとテレビを観る。))
- 03 (0.3)
- 04 徹 今↑ね:? 同級生としゃべって(つと)↑すぐもう就職とかの話になっちゃうからさ:.
- 05 (1.3)
- 06 徹 なんか嫌なんだよね:\_
- 07 (0.7)
- 08 母 やっぱりお前-お前はいいねって言われちゃう?  
(2つ目の「お前」のところから徹は食卓に視線を移す)
- 09 (1.7)
- 10 徹 .hh((首を横に振りながら)) 真面目だねみたいな話されるけど.  
(「だね」のところから徹はテレビのほうを観る)
- 11 (1.7) ((徹:テレビを観る。 母:お箸をお皿の上に置く。))
- 12 母 准君はさ:,それがすごい嫌だったんだってこの時期. ((准:徹の兄))
- 13 (0.9) ((14行目の「周り」まで、徹はずっと食卓を見ている。))
- 14 徹 (は/へ)::なんで?=周りにいいねってゆわれんのが?
- 15 (0.3)
- 16 母 准は准で悩んでたわけじゃん.
- 17 (0.5)
- 18 徹 うん.
- 19 (0.2)
- 20 母 自分の,
- 21 徹 うん.
- 22 (0.8)
- 23 母 この:,
- 24 (1.7)
- 25 母 先のことを考えてさ,
- 26 (0.2)
- 27 徹 うん.
- 28 (0.9)
- 29 母 そ-その気持ちってゆうのは誰にもわかんないじゃん=
- 30 =>その<不安だったりさ:,
- 31 徹 =うん.

<sup>6</sup> ここで「なんで?」に続いて「周りにいいねってゆわれんのが?」という内容が産出されているが、この部分は理由疑問文の命題内容ではなく、「なんで?」が聞いていることの回答候補を提示する、別のTCUである。

32 (0.2)  
 33 母 葛藤だったり、  
 34 (0.9) ((徹が頷く))  
 35 母 (りよ-/よう-)  
 36 (0.6)  
 37 母 なんつう(ん)だろ。  
 38 (0.6)  
 39 母 もう親の手を離れてあの子はじ-ね。  
 40 =じじ-自活してたんだから全然問題ないんだけど  
 41 =やっぱり .hhhh 親の目とかさ:, いろいろこう .hhh  
 42 (0.4)  
 43 母 守られてる(°じ°)ね.= [部分]で:,  
 44 徹 [う:ん.]  
 45 (0.4)  
 46 母 あの子はすごく葛藤してたんだけど、↑周りの人にし:てみたら:,  
 47 (0.6)  
 48 母 いいね: お前は\_みたいな。  
 49 (0.3)

((このあと、徹は机の上に置いてあるお皿を一つ持ち上げ、「使っていい?」と聞く。しばらくそれに関するやりとりがつづいた後、また兄の悩みの話に戻る。))

14行目において、徹がどのような相互行為上の課題に直面しているかを理解するために、まず、12行目の発話がどのような相互行為環境で産出されているかを確認する。01行目の前では、母は徹に、スーパーで支払いしようとしていた時、WAON ポイントがなぜか使えず、結局現金で払ってしまい、損をしたことについて語っていた。01行目では、その話題がすでに終わっており、徹と母は6.4秒の間ずっとテレビを観ている。そこで徹は02~06行目に、同級生と話すとすぐ就職の話になることへの不満を持ち出し、「嫌なんだよね:」と否定的評価を含む愚痴を発話する。「よね:」が付いていることから、受け手である母には共感的応答が期待されることがわかる。この連鎖環境で母は、共感を直接提示するのではなく、08行目で「やっぱり」を伴う極性質問「やっぱりお前-お前はいいねって言われちゃう?」を産出し、肯定回答が見込まれる形で愚痴内容の理解確認を行う(横森, 2018)。これは、愚痴内容の理解を根拠づけた上で共感を示すための前置きになりうる。しかし徹は10行目で首を横に振りつつ、母の回答候補を否定し、「真面目だねみたいな話されるけど」と修正する。ここで母は共感を再提示することもできたはずだが、11行目に1.7秒の沈黙が生じる。徹もテレビを観ることに戻っており、10行目の末尾の「けど」は最小限の付け加え(minimum expansion)として、話し手によるさらなる展開が続きにくい形式である(Yokomori and Endo, 2022)。その結果と

して、徹の愚痴に対して母の共感が十分に提示されないままだが、二人とも深掘りするような振る舞いが見られず、話題がこのまま終わってもいいと認識可能な時点に至っている。

次に、12行目の母の発話の特徴をもう少し詳しく見る。母は12行目で、兄の准の類似経験「准君はさ:,それがすごい嫌だったんだってこの時期.」を提示する。11～12行目にかけて母は箸を置き、右手で右上を指さすなど、より積極的に話すための身体配置へ移行している。内容面でも、准という別主体を導入することで、話題を推移させている。この12行目は「んだ」によって情報価値のある情報として組み立てられており、さらなる展開を可能にする。またこの発話の内容的には、Button and Casey (1985) および串田 (2006) が論じる「部分的報告 (partial report)」と類似しており、端的に提示した出来事の背後に、まだ語られていない続きや詳細があることを示すやり方になっている (串田, 2006: 221)。ただし本事例では伝聞 (「だって」) として提示されるため、話し手自身の経験の報告とは完全には一致しない。それでも、聞き手の反応次第で「続きを語る機会」が開かれる点は共通する (Button and Casey, 1985; 串田, 2006)。Button and Casey (1985) と串田 (2006) の知見によると、このような「部分的報告」のやり方は、さらに語る機会を与えるかどうかを聞き手の選択にゆだねることができる。聞き手が続きの展開を促す反応を示すと、「部分的報告」の続きを語るための機会が与えられることになる。つまり、ここで12行目の発話はまさに、徹の兄に関する情報価値のある内容を端的に示し、「これから語ることができるもの」として提示するというやり方で、この話をさらに発展させていく機会を作っていると考えられる。

次に、ターゲットラインの発話 (14行目) が上述の相互行為環境においてどのような特徴を持つかを論じる。まず、この発話は、母の端的に報告した情報の詳細を語らせる機会を与え、展開を促している。発話冒頭の「(は/へ)::」は、新しい情報を受け取った、直前の発話を「情報提供として登録する」と示していると考えられる (Hayashi, 2001; Mori, 2006)。特に Mori (2006) は、情報提供の直後の反応としての「へー」には驚きを示すことがあるが、語彙的な情報がないため、英語の “oh really” ほど明示的に驚きを示せるものではない、と述べている。つまり、母の「部分的報告」に対し、「(は/へ)::」という反応だけでは、十分に興味を示し、その続きを促しているとは言い難い。ここで、その後すぐに付け加えられた「なんで?」によって始めて、「部分的報告」の詳細を語らせる機会が母に与えられている。また、その後、「なんで?」の後に確認要求を追加することによって、徹は、母に知らされた准の出来事は知らなかったが、その出来事の主体である准については、ある程度語る権利はある、という認識的スタンスを示している。「なんで?」の後、徹はまたすぐに「周りにいいねってゆわれんのが?」と、新

たな TCU を追加産出し、准が真面目だねと言われるのが嫌だった理由について、自ら回答候補を提示し、母に確認を求めている。このような、回答候補を挙げた確認要求は、質問者にはある程度の確信がある、あるいは、ある程度の確信を持つだけの根拠がある、という認識的スタンスを示すことになる (Pomerantz, 1988)。つまり徹は、准が真面目だねと言われるのが嫌だったこと自体については知らなかったが、准がそうなった理由については、ある程度の確信を持って言える立場として、自分自身を位置づけている<sup>7</sup>。

以上の分析は、14 行目の後の会話参加者のふるまいによって裏付けることができる。まず、受け手である母は、14 行目の理由疑問文が求めている理由説明を、ミニマルに答えてはいない。母は、15 行目で 0.3 秒の間隙をあけた後、16 行目のように、徹を聞いている理由説明を「准は准で悩んでたわけ」と端的に答えてはいるが、語尾の「じゃん」によって、これはまず准についての共通理解を徹に確認しており、その後はまだ詳しく語る内容があると示す<sup>8</sup>。17 行目で徹の同意を得た後も、20、23 行目のように発話順番を考えながら非流暢的に組み立てたり、25、29 行目の「てさ,」「だったりさ:,」のように、発話順番を長く組み立てたりするような答え方をしている。一方で、徹は始終 21、27 行目のように、母が発話順番を組み立てる途中で「うん,」と相づちを打ったり、33 行目のように頷いたりすることで、聞き手であることを示している。つまり、母は徹の 14 行目の発話を、理由に関する情報を提示させるものではなく、詳細を語らせるものとして理解し、その機会をとって 16 行目から話題上の語り手の役割を引き受けており、徹は自ら話題上の聞き手として自分を位置づけている<sup>9</sup>。

---

<sup>7</sup> ここで回答候補を提示しない場合、もともと一定の知識を有しているはずの人物について、あたかも何も知らないかのように振る舞い、理由説明を全面的に相手に委ねるといった認識的スタンスを示すことになりうる。そのようなやり方も興味を示してはいるが、自分の既有知識を用いて回答候補を挙げて確認を求めるやり方と比べると、相対的に弱いやり方だと考えられる。徹はここで回答候補を挙げることで、ある程度知っている者としての立場を保持したまま、積極的に新情報への関心を示していると考えられる。

<sup>8</sup> 16 行目の共通認識の確認は、説明途中の理解確認である 29 行目の「その気持ちってゆうのは誰にもわかんないじゃん」とは違い、まだ何も説明していない時点で徹との共通理解を確認している。つまり、その確認内容は、徹がこの場の説明を聞いて入手するものではなく、徹が予め持っている知識だと、母は理解している。

<sup>9</sup> この理由疑問文がただ情報を求めているという点について、母の理由説明には、准の立場を擁護するように組み立てられている点も確認できる。16 行目の「准は准で悩んでたわけ」や、29 行目の「その気持ちってゆうのは誰にもわかんない」、44 行目の「あの子はすぐく葛藤してたんだけど↑周りの人にし:てみたら:,」のように、准の内心の葛藤が周りの誰にも分からないという、准の大変さを際立たせるような言い方がいくつか見られる。准の葛藤を説明する際も、「先のこと」や「親の目」、「守られてる部分」など、複数の要因を持ち出し、多角的に理由づけを行っている。つまり、母の理由説明は、准がそう思った理由を中立的に事実として徹に伝えているのではなく、准の正当性を守るような組み立て方をしている。

続く事例（7）は、事例（6）で示した相互行為実践を支持するバリエーション事例として位置づけられる。すなわち、理由疑問文が、相手の部分的な報告に対する関心を示し、その出来事の詳細の説明を要請するために用いられていることを示す点では事例（6）と共通する。一方で、ターゲットラインが産出される連鎖環境および後続の展開のあり方は、事例（6）とは異なる特徴を示している。この事例では、理由疑問文の受け手が、その理由についての知識が足りないが、知っている限りのことを積極的に提示することで、話題を「知らない」とだけで終わらせないようにしている。

【事例（7）】 CEJC T009\_017 17:55～

- 01 安藤 これ↑<銀杏>?  
02 俊明 =銀杏\_  
03 (1.3)  
04 安藤 ね銀杏って好き:?  
05 (0.7)  
06 俊明 >あの:<, ↑食べるの(は)好きだよ?  
07 (0.8)  
08 安藤 あたしさ:↑あんまり得意じゃないんだ:\_  
09 (1.2)  
10 俊明 えなんで?  
11 あのえぐみがやなの?  
12 (0.6)  
13 安藤 なんかね:あんまり好きじゃな:いんだよね?=食べれるんだけど.  
14 (0.2)  
15 俊明 うん.  
16 (0.8)  
17 安藤 なんでだろ.  
18 (0.8)  
19 安藤 匂いかな:.  
20 (0.8)  
21 俊明 [(ま)一応:あれだけどね:?  
22 安藤 [そんな強くな:い,(0.2)けどね?  
23 (1.0)  
24 俊明 アンモニア入ってるから.  
25 (0.6)  
26 安藤 ↑>うそ.<  
27 (0.4)  
28 俊明 そうだよ.=アン-これアンモニアの匂いなん[だよ?  
29 安藤 [まそうなんだけど:.  
30 (0.2)
-

((その後またしばらく、安藤が銀杏の何が嫌なののかについて二人が話していた。))

事例（7）は、安藤が恋人の俊明と散策している際の会話データである。断片の直前では、二人は寺の右側にある見晴らしのよい高台で写真を撮り、その後、寺の庭に戻ってきている。01 行目以降のやりとりは、その庭に戻った直後に、地面に落ちている銀杏に気づき、話題として持ち出したところから始まっている。以下では、事例（7）と事例（6）との違いを示しながら、事例（6）のバリエーション事例として、事例（7）を分析する。

第一に、連鎖環境の違いとして、本事例では、理由疑問文が産出される前に、先行話題が「ここで終わってもよい」と理解可能な位置に至っているわけではない。つまり、08 行目の安藤による「あんまり得意じゃない」という部分的報告の前に、06 行目の俊明の応答は、安藤のさらなる反応を期待している<sup>10</sup>。

第二に、理由疑問文の受け手（安藤）が、事例（6）の中の母のように、さらに語る材料を自ら提供していた（08 行目）が、その話の「理由説明」の部分では、事例（6）の母のように知識を持ってはいない（13 行目）。しかし、知識を持っていないにもかかわらず、ここで安藤は、理由疑問文によって始められた連鎖を閉じないように振舞っている。俊明は 10～11 行目で「えなんで？」に続けて「えぐみがやなの？」と回答候補を提示するが、安藤はこのあと、俊明の質問にはっきり答えられないが、直接に「わからない」と答えることを選択していない。まずは 13 行目で「なんかね:あんまり好きじゃないんだよね?」と、08 行目の評価の「あんまり得意じゃない」を「あんまり好きじゃない」に言い直し、ほぼ新しい情報を与えていない形で応答をする。その後、安藤は「食べれるんだけど」と情報を追加し、自身の応答を微調整し、言える範囲のことを積極的に差し出している。ここで安藤は俊明の質問にはっきり答えられないが、「知らない」「わからない」といった形で質問—応答連鎖を閉じるのではなく、一旦 08 行目の評価的発話を繰り返し、自分が提示可能な範囲の情報を差し出すことで、話題を継続可能な状

---

<sup>10</sup> 06 行目の俊明の発話は、安藤がこのあと銀杏に対してどのような評価を示すのかを待っている可能性がある。これは、04 行目の安藤の「ね銀杏って好き:??」が、沈黙後に「ね」を用いて相手の注意を引きつけたうえで、相手の好みという評価を尋ねる形で話題を立ち上げているためである。ある物事に対する好みを尋ねることは、話し手と聞き手の評価が一致するかどうかが問題になりやすい行為であり、相手の評価がまだ分からない段階で自分の評価を述べることには一定の配慮が求められる。実際、俊明は、05 行目、および 06 行目の冒頭のように、返事を遅延させている。加えて、「好きだよ」と言い切るのではなく、「食べるのは好きだよ?」のように、自身の肯定的評価をあえて一部に限定している。つまり、俊明の返事の遅延、および限定的な言い方は、どれも、安藤の質問をただの情報要求としない反応である。そのため、04 行目によって始まった[質問]-[応答]の連鎖は、06 行目の俊明の応答では閉じることができず、次に安藤自身の評価が続くことも期待される。

態に保つことを可能にしている<sup>11</sup>。

さらに、この志向は後続の振る舞いにも表れている。俊明が15行目で受け取りを示した後、安藤は17行目で「なんでだろ」と自己探索的に問いを立て直し、19行目で「匂いかな」と今思いついた理由を提示している。これらの発話は、外から与えられた問いに受動的に答えるというよりも、その嗜好評価をめぐって自ら理由を見いだそうとするものであり、安藤がこの話題を自発的に発展させようとしているのが見られる。

以上より、事例（7）においても、理由疑問文は、情報そのものを引き出すための質問としてではなく、前に部分的に提示された話の詳細を、積極的に展開することを要請するものとして、受け手に理解されることが示された。理由疑問文の受け手（安藤）は、理由を即座に言語化できないものの、「わからない」として連鎖を閉じることを避け、自分が言える範囲のことを継ぎ足し、さらに自己探索を続けることで話題を持続させている。

#### 4.1.2. 話題の詳細が展開できなかったケース

以上で事例（6）、（7）を用いて、理由疑問文を用いた以下の相互行為実践について説明した。つまり、ある新情報が端的に提示され、それがさらに語ることができる新たな話題として持ち出されるという相互行為環境において、その出来事に関する詳細な展開を引き出すために、理由疑問文が利用されている。前節の事例（6）、（7）では、理由疑問文の受け手が、積極的に話を詳しく展開し、掘り下げようとしているのが見られた。似たような相互行為環境が、次の事例（8）においても見られるが、少し異なっているのは、詳細を語る機会を与えられた話し手が、その後話題を積極的に展開してはいないというところである。

事例（8）は、姉の郁と妹の萌がカフェで飲食しながら雑談する場面である。断片の直前において、郁は、この前他の人とオーガニックコーヒーを飲みに行ったとき、コーヒーが薄く感じたと話している。このことに対し、萌は、「バリスタさんとかの、あれじゃない?」と、コーヒーを淹れる店員に原因があるかもしれないと推測している。しかし、郁は「バリスタ」という語を、「簡単に入る」ような機械として理解しており、萌はそれに対して修復を行わず、「うん.とかさ.あれだったのかもね.」と確認を与えている。ターゲットとなる発話は10行目の「へ::なんでj」である。

---

<sup>11</sup> この点は、この後4.1.2節で挙げる事例（8）、（9）において、理由疑問文に対して端的な理由を提示し、それ以上の展開を積極的にしない応答と対照的である。本事例では、安藤の応答は、理由説明の困難を示しつつも、話題の継続を回避しないという性質を持つ。

【事例 (8)】 CEJC K001\_008 00:40～

- 01 郁 スイッチ押したらぼわーって出てくるや[つ。  
02 萌 [う(h)ん。  
03 (2.0)  
04 郁 °>あれ<°↑<三千円>ぐらいで売ってるやつを買うとすぐ壊れるらしいよ?  
05 (0.9)  
06 萌 え\_あの: ,  
07 (0.4)  
08 郁 バリスタの機械。  
09 (0.7)  
10 萌 **へ::なんでい**  
11 (0.7) ((郁は口に食べ物がいっぱいな状態))  
12 萌 安(i)-安すぎて? ((郁:何か言いたげだが、食べ物ですぐには話せない))  
13 郁 詰まるんだって\_粉が(ね/め)い  
14 (0.8)  
15 萌 あ:::\_ ((郁:頷く))  
16 (0.3)  
17 郁 詰まりやすいんだって。  
18 (1.3)  
19 萌 へ:::::\_  
20 (0.2)  
21 郁 だからす:ごいまめに掃除す-して-  
22 (0.4)  
23 郁 <して> ,  
24 (0.3)  
25 郁 ま掃除しな(h)いといけ[ないんだろうけど]  
26 萌 [んん:::]::.  
27 (1.3)  
28 萌 え:::::\_  
29 そしたらちゃんとしたの買ったほ(h)う(h)HH  
30 (. )  
31 萌 \$掃(h)除(h)はしなきゃいけな(h)い(h)[ん(h)だ(h)\$ .H .H]  
32 郁 [ま掃除はしなきゃいけないんだ]けど,  
33 (0.2)  
34 萌 う:ん。  
35 郁 >こう<↑ある程度こう:  
36 (0.6)  
37 萌 う:ん。  
38 (0.2)  
39 郁 ね\_  
40 (0.5)  
41 萌 [ね。

42 郁 [雑に作ってあるのと>その<細[かく作ってる]のとちょっと違うんじゃない?  
 43 萌 [ う : : ん.]  
 44 萌 =そ[うかもね  
 45 郁 [わかんないけど.  
 46 (1.8)  
 47 萌 へ↑:::ゝ  
 ((この後、長い沈黙が生じ後、郁のスマホ画面に出てきた友人からのメッセージに関する話題になる))

まず、10行目の発話が答えている04、08行目の発話が、事例(6)の場合と似たようなことをしている。つまり、萌のある程度知識を持った対象についての新情報を、「部分的報告」というやり方で、端的に持ち出すことで、それをさらに語る機会を与えるかどうかを聞き手(=萌)の選択にゆだねている。上述のように、断片の直前では、郁はすでにバリスタが「簡単に入る」ものなのかについて、萌に理解確認をし、萌から確認を得ている。そのあと01行目において、郁はまたバリスタへの認識について萌に理解確認をし、萌は02行目で「う(h)ん.」と強く確認を与え、両者の間でバリスタの機械について共通理解がもう一度達成されている。その後03行目には約2秒の沈黙が生じていることから、バリスタについての認識確認が、それ以上の補足や拡張がなく、[確認要求]-[確認]の連鎖が閉じられ、ここまでの話題が完了可能になると分かる。このような相互行為環境において、郁は04行目の内容を発話する。ここにおいて、語尾の「よ?」から、郁がこの情報を萌にとっても新規性や情報価値をもつ情報として提示していることが分かる。また、「三千円」という極めて安い価格と、「すぐ壊れる」といった否定的な出来事によって、さらに語ることができるものを持ち出していると考えられる。これに対し、萌は06行目でまず「え\_」と無限定の他者修復を開始した。その後、萌がまた何かを言おうとしている途中で(06、07行目)、郁が08行目において、萌の06行目の修復開始を理解のトラブルとして扱い、「バリスタの機械」というふうに、04行目の部分的な報告の主体を明確化している。

以上で、ターゲットである10行目の発話の相互行為環境を確認した。次に、ターゲットラインの発話は何をしているのかを確認する。これも、事例(6)と似たように、当該出来事に関する詳細な展開を促している。まず、10行目冒頭の萌の「へ::」の反応は、先行発話を情報提供として登録する反応であり、その直後の「なんでゝ」によって、萌が郁のバリスタに関する内容に対し、より強い関心を持っていることが明確化される。その後、郁は口に食べ物が入った状態であったため、直ちにこの理由疑問文に応答することができず、これに対して萌は12行目で「安すぎて?」という回答候補を提示し、郁からの確認を求めている。

このように、4.1.1 節の事例と似たように、萌が郁に語りを先に進める機会を与えたが、郁が前節の事例のように、語りを自ら積極的に展開してはいない。萌の 10 行目の理由質問および 12 行目の確認要求に対し、郁は 13 行目において、その理解確認に対して明示的に答えてはおらず、むしろ 10 行目の「なんで」という理由質問の方にのみ反応し、三千円程度のバリスタがすぐ壊れる理由として「粉が詰まる」という説明を端的に提示している。この応答は理由説明としては十分に要点を満たしているが、これに対し、萌は即座に反応しておらず、14 行目には 0.8 秒という比較的長い沈黙が生じている。その後、15 行目になって初めて萌は「あ:::\_」というふうに、知識状態の更新を示す反応を示す。この萌の反応に対して、郁はうなずきによって応答し、その後 16 行目の 0.3 秒の沈黙を経て、17 行目で「詰まりやすいんだって」と、13 行目とほぼ同じ内容の理由説明を繰り返す。この再提示の後、18 行目には 1.3 秒の沈黙が続き、萌が 19 行目で再び「へ::::\_」と発話し、連鎖を閉じている。

前述のように、事例（8）と事例（6）の違いは、郁が話題上の話し手になる機会を与えられたにもかかわらず、郁がこの話題を、詳しく展開する様子が見られなかった点である。郁は理由を端的に説明した後、それ以上の詳細や補足を付け加えずに話を収束させようとしている。しかし一方で、萌が 10 行目の理由疑問文によって期待していたのは、13 行目のような端的な理由説明ではなく、より詳細な展開であったと考えられる。なぜなら、13 行目の郁の応答は、10 行目の萌の疑問を解消する新しい情報であり、普通、質問した側が、このような応答をもらった後、「そうなんだ」などのように、知識状態の更新を示す反応ができる。しかし、既に郁の発話が完了可能点に到達しているにもかかわらず、萌がターンを取ってその情報に対して反応をせず、代わりに、何も言わずに、郁が発話を続けるのを待っている。その結果、14 行目で 0.8 秒という長めの沈黙が生じている。0.8 秒の沈黙が生じ、郁がこれ以上話すことがないことがようやく確認できる時点で、やっと萌が知識状態更新の反応を示している。

すなわち事例（8）では、理由疑問文によって詳しい展開が要請されているにもかかわらず、話題上の話し手側による説明は最小限にとどまっており、その要請は十分には達成されていない。つまり、事例（6）で分析した相互行為実践がそのままの形で起きていない事例のように見える。しかし、萌の 14、15 行目の振る舞いを検討すると、萌が単に理由説明を情報として求めているのではなく、郁に詳しく語ってもらうことを志向していたことが示唆される。したがって本事例は、話題のさらなる展開が実現しなかったという意味での「失敗例」であると同時に、理由疑問文が話し手に詳しい語りを要請する資源として機能していることを、参加者側のふるまいから逆に裏づける事例であると言える。

【事例 (9)】 CEJC T010\_009 22:15~

31

事例（9）の断片直前では、教員である石塚と大学3年生の徹が研究室で会話をしており、石塚がかつて自宅で使用していたランタンのような石油ストーブについて語っている。徹は01行目で驚きを示し、続く02行目では、石塚がその石油ストーブの具体的な使い方を付け加える。これに対して徹は04行目で「めちゃめちゃおしゃれですね」と評価を行う。石塚は05行目でこの評価に同調しつつ、「あったかくてよかったよ」と、自身の経験に基づく追加情報を提示する。この追加情報は、語尾の「よ」から、徹にとって未知の情報として提示されていると分かる。これに対し、徹は07行目で「それいいですね」と、04行目よりも汎用性の高い、まとめ的な評価を行う。08行目では、石塚が1.4秒の間にわたって連続してうなづくことで、この評価を承認しており、ここで石油ストーブに関する話題は、ひとまず終わってもいい地点に至っているといえる。

このような環境のもとで、徹は09、10行目において、石塚が知らないであろう自身の出来事を、端的に報告する。これに対して石塚は11行目で、徹の発話の語尾と部分的に重なる形で、「なんで？」という理由疑問文を、軽い笑いを伴って産出している<sup>12</sup>。この笑いを伴う理由疑問文は、徹の部分的報告の内容を「笑ってもいい (laughable)」出来事として遡及的に理解したことを示すとともに、質問という行為を媒体として、その後の応答を強く要請する働きを持っている。すなわち、石塚はここで、徹の部分的な報告を、さらに語るべき余地のある面白い出来事として扱い、「続けて語ってよい」機会を徹に与えている。

しかし、その後の徹の応答は、石塚のこの期待に必ずしも応えるものではない。徹は13行目で、「結露するんですよ」と、理由疑問文が求めている情報を端的に提示するにとどまり、それ以上の詳細や語りの展開を行わない。また、この応答では、笑いが伴っていないため、徹は自身の行動を笑われるべきものとして位置づけてはいない。むしろ、石塚の知らない事実を伝える話し方（「んですよ」）をとっている。徹の端的な応答の後、石塚は15行目で軽い「あ::」という反応を示し、知識状態の更新を示唆するとともに、うなづきを繰り返してその情報を受け取ったことを示している（15、16行目）。ここでは、徹が13行目および17行目で、理由疑問文に対して端的な情報提供を行い、石

<sup>12</sup> 今までの事例とは異なり、この事例において理由疑問文の後に回答候補が追加されない点で特徴的である。事例（9）において、石塚は教員であり、ゼミ生である徹について当然一定の知識を有している立場にある。しかし、09行目で徹が部分的に報告している出来事は、徹自身の家庭内での生活様式に関わるものであり、この知識領域は、教員と学生という関係性から見て、教員が通常知り得るものではない。そのため、この場面で石塚が「なんで？」のみを産出し、回答候補を提示しないやり方は、むしろ当該領域に対する知識の有無を敏感かつ適切に反映した応答であると考えられる。

塚が 15 行目以降でその情報を受け取ったことを示す反応を行った後、18 行目には短い沈黙が生じている。この沈黙は、「冬に窓を開けて寝る」に関する話題が、相互行為的にはここで終わってもよい位置に到達していることを示している。

しかし、このような話題終結が可能な位置においても、石塚は 18 行目で「朝起きるとばーん」と、徹の応答では話されなかった、結露の様子をやや誇張した表現と身体動作を伴って、自分の理解を示している。この振る舞いから、石塚が 10 行目の理由疑問文によって期待していたのは、12 行目や 16 行目のような端的な理由説明にとどまる応答ではなく、当該出来事についてのより詳細で具体的な展開であったことが示唆される。すなわち、石塚は、徹の経験を「それ以上掘り下げる価値のある面白い話題」として扱い、その面白さや具体的様相をさらに共有することに志向していたと考えられる。

この点において、事例（9）は事例（8）と同様に、理由疑問文が、単に理由を情報としてもとめるのではなく、話題上の話し手による詳細な語りの展開を促すという働きが、必ずしもうまく実現されるとは限らないことを示す事例である。しかし、その働きがうまく実現できていない場合でも、その後の会話参加者の振舞いから、その働きに志向する反応が見られ、事例（8）と同じように、事例（6）の反証的事例として位置づけられる。

#### 4.2. 相互行為実践 2：相互行為上の積み残しへの対処としての話題移行

以上の 4.1 節では、相手が情報価値のある何らかの出来事について、ごく簡単に言及するにとどめ、その中身がまだ語られていない局面において、理由疑問文が相手から詳しい展開を要請するために用いられる実践を見てきた。4.2 節では、それと別の相互行為実践を説明する。

4.2 節では、やりとりの中で生じた論点や食い違いがはっきり整理されないまま、会話がいったん区切られるような、相互行為上の積み残しがある場面において、理由疑問文が用いられる実践を扱う。「もうこの話題は終わってもよさそうだ」という位置に来ている、つまり、話題の境界（Schegloff and Sacks, 1973）が形成されているにもかかわらず、直前のやりとりの中に、どこか言い残された点や整理されないまま残っている点が含まれているような局面である。

ここで問題になっているのは、直前のやりとりの中に、相互行為上の積み残しがあるにもかかわらず、それをそのまま取り上げて話を続けることも、かといって何事もなかったかのように全く別の話題に切り替えることも、どちらもしにくいような局面である。このような相互行為上の課題に対処するための一つの方法として、参加者は、その「積み残し」そのものには立ち戻らないが、先行発話の中に含まれていた別の付随的な側面

に言及することで、話題の焦点を少しずらしながら、新しい話題へと移行していくことができる。その際に用いられるのが理由疑問文である。

本節で扱う事例に共通して見られるフォーマット上の特徴は、4.1 節で見た「なんで?」という疑問詞単独の形式ではなく、「なんで+命題内容?」という発話フォーマットが用いられている点である。ここで用いられる命題内容は、直前のやりとりの中に含まれてはいたものの、それ自体が中心的な話題としては取り上げられていなかった、いわば付随的な側面の内容である。

以下で、4.2.1 節では、会話参加者の間で意見が明らかに対立したまま、話題が終わってもよい位置に来ている事例を扱い、4.2.2 節では、意見の対立がはっきりしているわけではないものの、ある問題について明確な結論に至らないまま話題が収束している事例を扱う。いずれも、相互行為上の積み残しが残ったまま話題の区切りに来ているという点では共通しているが、その積み残しのあり方が異なっている。

#### 4.2.1. 会話参加者間の意見が明らかに対立しているケース

まず、前述の主張を、事例（10）を用いて説明する。事例（10）では、彩香が友人の秀夫の事務所に遊びに来ている。秀夫は彩香の隣の机で、彩香に背を向けてパソコンで作業しながら彩香と話している。秀夫のやっている作業は、ブルーレイの外装ケースの裏面のデザインである。デザイン領域が少ない上に、文字量が多すぎて全部入りきれないと秀夫がイライラしている。事例（10）のターゲットラインは、30 行目に産出される彩香の発話である。

【事例（10）】 CEJC T008\_005a 02:26～

- 01 秀夫 あ::↑:↓:↑:↓::もう↑入らないんだよ[:.  
02 彩香 [ >だから<入れなきゃいいじゃん.  
03 (0.9)  
04 彩香 (あ)なんか赤くしてさもうこぼれるとこ=  
05 =全部赤字にしてさこここぼれますよ?って.  
06 (0.2)  
07 彩香 なんかして↑くるよ.デザイナーさんとかほかの.  
08 (. )  
09 秀夫 本当[:?  
10 彩香 [なんか,みんな偉そうだな:と思って.  
11 =(い:)↑こっちが入れろって言ったもん入れろよ=  
12 =とかゆう気持ちになったりするもん.  
13 (0.2)  
14 秀夫 そうでしょう?=↑だから嫌(h) なんだよ勝手に切るの(h)

15 (0.5)

16 彩香 ↑>そりゃそう<なんだけど,

17 (0.2)

18 彩香 ただこれは:あまりにも多すぎるよ\_とか言えばいいじゃん.

19 (0.7)

20 秀夫 う:んま↑そうなんだけど:で[も,

21 彩香 [コーヒーもらってもいい?

22 (.)

23 秀夫 うん. ((23行目から彩香はコーヒーを入れている))

24 (0.7)

25 秀夫 でも:↑今まで入れちゃってたから:,°he°

26 (0.5)

27 彩香 °ま°↑そうだろう°けど°.

28 秀夫 °ん.°

29 (1.4)

30 彩香 ↑**なんでわたしにそんな棘のある言い方されなきゃいけないんだ.**

31 秀夫 =え?だって,

32 >こうすればいいとかああすればいいとか<って\$指図するから::\_ \$

33 (0.6)

34 彩香 指図したんじゃない(よ/オ).

35 (1.2)

36 彩香 ね:.

37 (0.2)

38 秀夫 指図じゃない.=↑なんなの?じゃあ.

39 (0.2)

40 彩香 え今のはアド°°バイスだよ°°. ((「バイスだよ」のところはささやき))

41 (0.3)

42 秀夫 アドバイスか.

43 (0.5)

44 彩香 [見て:?] ((持っているカップを秀夫に見せる))

45 秀夫 [偉す-(.)え]らそうじゃん.

46 (1.3) ((秀夫振り向く))

47 秀夫 あっ\_

48 (0.8)

49 彩香 これはわたしが(. )金継ぎしたやつだよ.=青いけど.=青いけど[金継ぎ.

50 秀夫 [青継ぎだよ.

51 (0.8)

52 彩香 °うん.°

53 (0.2)

54 彩香 °そうだね.°

55 秀夫 うん.

56 (1.1)

((この後は金継ぎという言葉の使い方についての話になる))

まず、ターゲットラインの発話が、どのような相互行為環境の中で産出されているのかを記述する。01 行目で秀夫は、送られてきた文章が長すぎて画面に入りきらないということに対して、不満を述べている。これに対し、彩香は 02 行目で秀夫の文句に対する共感や同調を示さず、「>だから<入れなきゃいいじゃん.」と提案している。その後 03 行目では 0.9 秒の間が入り、04 行目から彩香は「入りきらない部分を赤字にして返す」という具体的な対処法を提案している。しかし、09 行目の「本当？」や 14 行目の「だから嫌なんだよ勝手に切るの」の発話に見られるように、秀夫は彩香の提案をそのまま採用する姿勢を示していない。これに対して彩香は 16 行目および 18 行目で、自身の提案を再提示するが、20 行目において秀夫は「↑そうなんだけど:でも,」と述べ、彩香の提案の合理性を一定程度認めつつも、最終的には同意に至らないと返事している。21 行目から 23 行目にはコーヒーに関する短いやりとりが挟まれるが、25 行目で秀夫は 20 行目の末尾の「でも」を繰り返すことで、20 行目でやり損ねた発話を再開し、これまで入れてきたという理由を挙げながら、彩香の提案に対する不同意を再度明確化する。この再度の不同意に対し、彩香は 27 行目で「°ま°↑そうだろう°けど°。」と応答する。この返事は、秀夫の主張の合理性を部分的に認めつつも、全面的な同意は与えないというスタンスを示すものである。さらに注目すべき点として、この発話は「けど」で終結しているが、末尾の「けど」の音量が前の部分より小さく、韻律的にも続きがあるようにはなっていないため、彩香が秀夫の主張に完全には同意できないが、さらに反論することもないということを示していると考えられる。28 行目で秀夫もまた、小さい声量で、最小限の受け取りの反応を行う。その後 29 行目には 1.4 秒の沈黙が生じ、話題の境界が形作られている (Maynard, 1980)。

以上のことから、01 行目から 29 行目までのやりとりは、「入りきらない文章をどう処理するか」という問題に関する提案—不同意のやりとりであり、会話参加者の間に、相互行為的には合意に至らないまま、話題が終わってもいい場所に到達しているといえる。すなわち、彩香の 27 行目の発話および秀夫の 28 行目の最小限な応答、ならびにその後の 1.4 秒の沈黙によって、この話題は「ここで終わってもよい」と理解可能な場所に至っている。このような環境のもとで産出されるのが、30 行目の彩香による理由疑問文である。

次に、30 行目の発話がこのような相互行為環境において何をしているのかについて分析する。この発話は、発話形式的には「なんで+命題内容」というフォーマットをとっているが、その命題内容は、先行するやりとりにおいて明示的に言語化されていた内容ではなく、「棘のある言い方」という、先行発話の主な意味内容に付随する、発話の仕

方に関する側面を、遡及的に問題化している。つまり、直前のやりとりに関連しつつも、そのやりとりの中では公然化されていなかった、秀夫の発話の言い方のあり方を前景化している。このようなやり方によって、話題の移行が断絶的に行われるのではなく、先行発話とある程度の関連性を維持したまま行われることができる。

この理由疑問文が、先行する話題からの自然な離脱を可能にしていることは、その後の会話参加者の振る舞いからも裏付けることができる。まず、30行目の理由疑問文に対する秀夫の応答に注目する。31行目で秀夫は、まさに彩香の理由疑問文が聞いている内容、つまり自身の発話が「棘のある言い方」になっていた理由を説明している。加えて、秀夫が彩香の提案内容に言及していた際、提案内容そのもの（入りきらない文章をどう処理するか）には立ち戻らず、「こうすればいいとかああすればいいとか」のように、彩香の発話の仕方に焦点を当てたのである。すなわち、秀夫は彩香の提案の妥当性や採否をめぐる問題にはもはや注意を向けておらず、彩香の話し方へと話題の重心を移している<sup>13</sup>。彩香の振る舞いもまた、この移行を支持している。秀夫の説明に対し、彩香は0.6秒の間を置いた上で、「指図したんじゃない」と述べ（34行目）、さらに「今のはアドバイスだよ」と自身の行為の再定式化を行っている（40行目）。ここで彩香は、提案内容の是非ではなく、自身の行為がどのように理解されるべきかという点をめぐる議論の展開を可能にしている。つまり、彩香自身もまた、先行する「入りきらない文章をどう処理するか」という話題を引きずることなく、話題を自分自身の行為の位置づけへと移行させている。以上のように、30行目の理由疑問文の後では、両参加者ともに、先行する提案—不同意のやりとりには立ち戻らず、お互いの発話の仕方や行為の理解をめぐるやりとりへと進んでいる。このことから、30行目の理由疑問文は、合意に至らなかった話題からの自然な離脱を可能にし、その後の相互行為の展開を別の方向へと導く働きをしているといえる。

以上で事例（10）を用いて、直前のやりとりにおいて参加者のあいだで合意が十分に形成されないまま、その話題が終わってもよい場所に至っているという相互行為環境において、会話参加者が、先行発話で公然化されていなかった付随的な側面を、遡及的に問題化し、前の話と関連づけながら、自然に話題を移行する資源として理由疑問文を用いる実践を記述した。同じことが以下の事例（11）においても見られる。事例（11）は、母の島村と息子の健三郎が自宅で、料理レシピを参照しながらお菓子を作っている。タ

---

<sup>13</sup> また、32行目の発話の最後は、笑いを含んだ音調で産出されている。この韻律的特徴は、「指図する」という行為記述が持ちうる対人的な攻撃性を和らげる働きをしていると考えられる。このことも、秀夫が、先行するやりとりに見られたような、問題解決に向けて真剣に議論をつづけることからすでに離脱していることの証拠だと考えられる。

ーゲットラインは、12 行目の発話である。

【事例 (11)】 CEJC K004\_011 05:29～

- 01 島 村 あっ, そうだまだ予熱にかけちゃいけないんだ.  
02 =だってチョコを電子レンジで溶かす計画なんだ[から.  
03 謙三郎 [お::¥君だったのか[ね:.¥  
04 島 村 [あ:ぶない.  
05 謙三郎 [ヨシオ君. ((キャラクター名。推理小説の登場人物?))  
06 島 村 [や:めなさいやめなさい. やめなさい.  
07 謙三郎 あれっ, どうしたのお母さん. ((演技的な声色))  
08 ヨシオ君, なんかした? ((演技的な声色))  
09 (1.6)  
10 島 村 °°ったく°°.  
11 (0.3)  
12 謙三郎 **ねお母さんそっかヨシオ君なんで読まないの:?**  
13 (0.2)  
14 島 村 え?  
15 (0.2)  
16 島 村 う:ん. 時間がなくてね?  
17 (0.2)  
18 謙三郎 ヨ[シオ  
19 島 村 [読みたいんだけど.  
20 (0.3)  
21 謙三郎 ヨシ[オ君が泣くぞ.  
22 島 村 [塗れた?  
23 (0.3)  
24 島 村 °うん.°  
25 (0.7)  
26 島 村 で[は  
27 謙三郎 [↑じゃとりあえずヨシオ君が何した人かゆう[よ?  
28 島 村 [¥だめだめだめだめだめ¥  
29 (0.4)  
30 島 村 ¥だめだ(よ/お)¥  
31 島 村 ネタバレ:はいけませんよそういう,

まず、12 行目の発話がどのような相互行為環境の中で産出されているかを確認する。02 行目において島村は、まだ予熱にかけてはいけないことの理由を述べる際、「計画」という表現を用いている。これに対して謙三郎は 03 行目で「お::」というふうに強い反応を示し、演技的な声色を用いながら発話している。演技的な声色だけでなく、この発話は、母である島村を、「君」と呼んでおり、「君だったのかね」という、推理小説の

探偵役を想起させるような言葉遣いも使っている。このような特徴から、ここで謙三郎は、推理小説の登場人物を演じながら話そうと、島村を誘っていると考えられる。これに対して島村は、04行目で「あ:ぶない」と、料理に従事していることを示し、さらに05行目で「やめなさい」と繰り返すことによって、謙三郎が持ちかけた誘いを受け取ることなく拒否している。その後、07、08行目において、謙三郎は引き続き演技的な声色を維持し、しかも母の島村を「ヨシオ君」として呼び、話しかけている。しかし、この再度の誘いに対して島村は、09行目の1.6秒の沈黙および10行目の小声による「°ったく°」によって応答し、謙三郎の誘いへの返事を回避している。さらに11行目の0.3秒の間でも新たな応答はなされておらず、謙三郎の誘っている演技的なやりとりは展開しないまま、流されていくと考えられる。

このように、02～11行目にかけてのやりとりは、謙三郎による演技の誘いと、島村による拒絶が繰り返されると記述できる。そして二人の間は合意に至らないまま、島村の10行目の回避と、11行目の沈黙によって、この話がそのまま流されていく方向に向かっている。したがって、12行目の発話は事例（10）の場合と似たように、直前のやりとりにおいて、参与者間で合意が十分に形成されないまま、その話題が終わってもよい場所に至っている、という相互行為的環境の中で産出されている。

次に、12行目の発話が、このような相互行為環境において何をしているのかを検討する。この発話の形式的特徴として、第一に、発話冒頭に「ねお母さん」という呼びかけが付加されている点が挙げられる。このような呼びかけ表現は、通常、だれかと会話を始めたい時や連鎖の前置きとして用いられることが多いが、ここではすでに会話が5分以上もつづいており、しかも0.3秒の前に二人はまだやりとりしていたという状況である。ここで呼びかけの表現が使われているのは、直前のやりとりとの区切りを示し、新しい連鎖を始めることを示していると考えられる。第二に、「そっか」という気づきを表す表現が用いられている点である。この表現が発話順番の冒頭に置かれることによって、後続する発話内容が、話し手が新たに得た理解に基づいた内容であることが予示されている。続くのが「ヨシオ君なんで読まないの?」という理由疑問文である。この理由疑問文では、事例（10）の場合と同じように、発話形式的には「なんで+命題内容」というフォーマットをとっており、その命題内容は、先行するやりとりの中のどこでも明示的に述べられてはいない。むしろ、島村が一貫して謙三郎の演技的な誘いに応じなかったという先行発話の付随的な側面から、謙三郎が推測した内容であると捉えられる。謙三郎は、この推測された事柄を理由疑問文という形式で取り上げ、その合理性を疑っている。以上より、12行目の発話は、先行する[演技の誘い]-[拒否]のやりとりと関連を持ちつつ、それに立ち戻るのではなく、そこから得られた理解や推測をもとに、新たな

話題を導入している発話であるといえる。

この理由疑問文が、先行する話題からの自然な離脱を可能にしていることは、その後の会話参加者の振る舞いからも裏付けることができる。まず、12行目の理由疑問文に対する島村の応答に注目すると、島村の理由説明は、理由説明を遅延させるための14行目の無限定の他者修復開始「え？」<sup>14</sup>や、16行目の「時間がなくてね」や19行目の「読みたいんだけど」といった中止形や譲歩的表現を伴っている。これらの形式は、「ヨシオ君を読んでいない」という行為が、そのままでは正当化されにくいものであるという理解を示しつつ、自身の行為の合理性を弁明するものである。つまり、島村はこの理由疑問文による発話を、自身の行為の正当性が問われているものとして理解し、それに応答することに志向している。謙三郎のその後の振る舞いも、この移行を支持している。21行目の「ヨシオ君が泣くぞ」という発話は、島村がヨシオ君を読んでいないことに対する軽い不満を示すものであり、先行する演技的な誘いを再開するものではない。この点からも、謙三郎自身が、演技の誘いという先行話題には立ち戻らず、12行目で導入された新たな論点に沿って会話を展開していることが分かる。

#### 4.2.2. 会話参加者間で明確な結論が出ないケース

以上、4.2.1節の事例では、ターゲットラインの前に、会話参加者間の意見が明らかに対立しているのが見られる。このような、意見が対立したまま話題が終わっている場合のほかにも、特に意見の対立が見られないが、ある難しい問題について、会話参加者間ではっきりとした結論が出ないというバリエーションも見られる。以下では、事例(12)、(13)を用いて、このバリエーションを示す。

事例(12)は、徹と母が夕食を食べながら雑談している場面である。徹は大学で日本語学を学んでおり、母は学習塾で教えている。断片の前において、二人は漢字の書き方の採点基準が昔ほど厳しくなくなっているという話をしていた。断片の直前では、文科省の教職の先生による説明として、「漢字が読めないと恥ずかしいから」ではなく、「日本語は英語のように単語の区切れがないため、漢字を教える必要がある」という趣旨が提示されていた。ターゲットラインは、22行目の母による発話である。

#### 【事例(12)】 CEJC T010\_002a 06:58～

---

<sup>14</sup> ここの「え？」が理由説明を遅延させるためであると言えたのは、「え？」と他者修復開始を行った後、謙三郎からの修復実行がないにもかかわらず、島村は16行目で、12行目の発話が求める理由説明を開始したためである。このことから、島村は実は14行目の時点で既に12行目の発話を十分に聞き取り、理解したと分かる。

01 徹 それはわかったんだけど:,(口に食べ物がいっぱい)  
 02 (1.2)  
 03 母 >(ウ)さ<それ日本人には通じるけどさ:,  
 04 徹 うん.  
 05 (0.6)  
 06 母 あそっかいのか今-今それ日本人を:メインで話してんのか.  
 07 (0.2)  
 08 徹 うんでもさ外国人:::外国人てゆうと言い方あれかもしれないけど.  
 09 母 それは対象になってないもんねごめん.  
 10 徹 にはちょっとだから.  
 11 (0.4)  
 12 徹 でも難しいかもしれない↓ね.  
 13 (16.3)  
 14 母 ↑あらゝ ((テレビを観ながら))  
 15 (8.9)  
 16 徹 変わってな(h) いね. ((テレビの中の人のこと))  
 17 (0.2)  
 18 母 う:ん.  
 19 (2.2) ((1.6秒ぐらいのところから、徹はテレビを観る))  
 20 徹 (ん)(なん/な:)難↑しいな? ((視線をテレビから机の上の食べ物に移す))  
 21 (2.0)  
 22 母 **でもさ↑なんでそこの道を君は選んだんだ.** ((発話とともに視線を食卓に戻す))  
 23 (0.5)  
 24 徹 教員? ((ナンみたいな食べ物を口に入れる))  
 25 (0.3)  
 26 母 うん.  
 27 (1.4) ((徹:食べ物を3回ぐらい咀嚼))  
 28 徹 教えんの好きだし.  
 29 (2.9) ((母:食べ物を皿の中から自分のお椀の中に移している))  
 30 母 おし-教えてる?ちゃんと.((食べ物を皿の中から自分のお椀の中に移している))  
 31 (0.3)  
 32 母 教えられてる?  
 33 (0.7)  
 34 母 ってゆう実感ある?  
 35 (0.3) ((徹:首をかしげ、眉を顰める))  
 36 母 自分で. ((徹:首をかしげ、眉を顰める))  
 37 (0.8)  
 38 徹 ↑どうだろうな:\_ ((眉を顰める))  
 39 (0.4)  
 40 母 あっ\_  
 41 (0.2)  
 42 母 答え教え(ちゃ/じゃ)ったりしない?  
 43 =ちょっと(アテ/あたし)お酒持ってきていい?

まず、22行目のターゲットラインの前のやりとりについて整理する。01～12行目では、漢字を教える必要性という問題をめぐるやりとりが行われている。徹は01行目で「それはわかったんだけど」と述べ、先行する文科省の先生による説明への一定の理解を示しつつも、「けど」によって疑問があることを示し、発話を産出途中で滞らせている。その後、母は徹がその疑問を最後まで言うのを待たずに、03行目で「それ日本人には通じるけどさ」と述べ、先行の説明を、日本人向けの説明と位置づけた上で、外国人という視点を持ち出して疑問を示そうとする。しかし、この疑問はその後06行目で「今それ日本人をメインで話してんのか」と言い直され、途中で引き取られる。しかし徹は08行目で、「うんでもさ外国人:::」と発話を開始し、母が持ち出した「外国人」という視点に沿って説明を続けようとする。09行目で母は「それは対象になってないもんねごめん」と述べ、再び自らの疑問を撤回するが、徹は10行目で「にはちょっとだから」と、08行目の発話に文法的につながる形で説明を継続する。しかし、その説明は非流暢で、明確な結論には至らない。11行目の間を挟み、12行目で徹は「あ、でも難しいかもしれないね」とまとめることにより、この話題を切り上げている。この間、母は、徹の説明に対して同意や不同意を明示的に示すことはなく、話題をさらに掘り下げる動きも見せていない。その後、二人はテレビを観ながら食事をし、テレビに出た人物について短い発話を交わしている(13～19行目)。つまり、01～19行目のやりとりでは、漢字を教える必要性がどこにあるかという問題について、参加者双方がはっきりとした意見を出せないまま、話題が放置されている。すなわち、明確な対立は生じていないものの、結論が出ないまま、誰もこの問題を継続しようとししない。

次に、ターゲットライン直前の発話である20行目の徹の発話について検討し、22行目の理由疑問文が産出される相互行為環境を整理する。20行目の「(ん)(なん/な:)難↑しいな?」という徹の発話は、12行目で徹自身が用いた「でも難しいかしんない↓ね。」と話題を締めくくった際のまとめの発話の主要部分を、改めて繰り返すものである。この発話は、語尾に終助詞「な?」が付いており、つぶやきのような仕方で産出されている点において、順番交代組織や行為連鎖組織において強い制約を課すものではない。一方で、この発話が先行話題の全体的な性質を自ら定式化している点では、先行話題に関連する、潜在的言及しうる内容が、その後に持ち出されることを可能にする足がかりを提供している<sup>15</sup>。このような環境のもとで、22行目の理由疑問文が産出されている。

<sup>15</sup> 平本(2011)が論じる、名詞(句)の形をとる「話題アイテム」とは完全に一致するわけではないが、「難しい」も先行する話題の全体的な性質を定式化している点では、「話題アイテム」と類似し

次に、22行目の発話がこのような相互行為環境において何をしているのかについて分析する。22行目の発話は、事例（10）、（11）と同様に、「なんで+命題内容」という理由疑問文のフォーマットをとっている。加えて、本事例では、発話順番の冒頭に「でもさ」という談話標識が置かれている。この「でもさ」は、後続する発話内容を、直前の発話の単なる継続としてではなく、先行発話とは異なる側面や見方として聞くよう枠付ける働きを持つ（Tanaka, 2015）。続く理由疑問文の命題内容である「その道を選んだ理由」は、事例（10）、（11）と同じように、先行する「漢字を教える必要性」をめぐるやりとりの中では、これまで一度も明示的に言及されていないが、先行話題の中心的内容との関連性は事例（10）、（11）と比べると見出しにくい。一方で、「その道」という指示表現によって、先行するやりとりの話題と関連する教職や教育という領域を指しており、先行話題とはやはり一定の関連性も保っている。以上を踏まえると、20行目の徹の発話によって、しばらく前に終結可能な位置に至っていた話題に関連する何らかの事柄へと、再び言及することが可能な環境が形成されている。そのような環境のもとで、母は、「でもさ」という談話標識を用いながら、先行話題とは直接的には結びつかないが、一定の関連性を保った新たな話題として、徹が教員の道を選んだ理由を聞くことで、話題を移行させている。

4.2節で見てきた事例では、いずれも「もうこの話題は終わってもよさそうだ」という位置、すなわち話題の境界がある程度ははっきりと見える位置の事例だった。これに対して、次の事例（13）は、そのような意味での明確な話題の境界が直前に見られるわけではない。具体的には、会話参加者がある「よく分からないこと」についてやりとりを続けた末、結局ははっきりとした結論に至らないまま、この話題をこれ以上続けても前に進まない、いわば話題が行き詰まった状態に来ているという場合である。しかし、相互行為上の積み残しがある点においては、4.2節で見てきた事例とは共通している。

事例（13）では、母の日野と息子の正和が車で移動している。断片の直前において、日野は、今車が止まっている場所の近くに、長女の昔の公文の先生が住んでおり、昔祭りの時この近くで偶然会っていた話をしていた。その時日野は、その先生がこんなところから公文に来てたんだと思った（01行目）。息子の正和も共感を示した（02行目）。ターゲットラインは、23行目の正和による発話である。

【事例（13）】 CEJC C002\_008 10:02～

01 日野        でもそんなところから来てたんだって°.h°[思ったんだよ(ね)((鼻をすする音))

---

た発話になっていると考えられる。

02 正和 [ね:思っちゃうよねい  
03 (0.7)  
04 正和 だいが遠いよ [ねい  
05 日野 [う [ん.  
06 正和 [あの:, そ->寒川 [小<?  
07 日野 [うん.  
08 (2.0)  
09 正和 °え°  
10 (0.3)  
11 正和 乗り換え?  
12 (1.1)  
13 日野 車で来てたんじゃないかな: [:\_  
14 正和 [あ::.  
15 正和 そうだよね [:い  
16 日野 [う:ん.  
17 (1.3)  
18 正和 >でも<車止めるとこなんてあったっけ.  
19 (2.0)  
20 日野 学校(とか)に止めときゃいんじゃ(h)な(h)い(h)の(h)  
21 (.)  
22 日野 だ(h)め(h)か(h) [.hh ((鼻をすする音))  
23 正和 [↑**なんであんどこまで来てたの.**  
24 (0.6)  
25 日野 や, たぶんね:, 公文の先生になるじゃん.= [登録するじゃん.  
26 正和 [うん.  
27 正和 うん.  
28 日野 そ:- そのあとに:,  
29 たぶん近いところを紹介してくれたりとかするんだと思うんだよねい  
30 正和 うん.  
31 日野 あるいは:, この学校::, (.)の近くで:, 教室を- .hh  
32 (1.3)  
33 日野 かい- あの::ひらく:, ようにしますから ここをやりますか?ってゆうような.  
34 (0.2)  
35 正和 う::ん.  
36 (0.5)

事例(13)は、前述のように、これまで4.2節で検討してきた事例とは、ターゲットラインが産出される相互行為的環境において異なっている。事例(10)、(11)、(12)では、理由疑問文が産出される前に、参与者間で合意に至らないまま、あるいは結論が出ないまま、つまり、相互行為上積み残しが残ったまま、話題が終わってもよいと理解可能な位置に到達していた。一方、事例(13)では、先行話題がそのような明確な終結

可能な位置に至っているとは言い難い。というのも、ターゲットラインの23行目が産出されたのは、22行目の日野の「だ(h)め(h)か(h)」の発話がなされた直後である。また、理由疑問文の命題内容の性質も異なっている。事例(10)、(11)、(12)では、理由疑問文は、先行するやりとりの中で明示的に言語化されていなかった付随的な側面を取り上げ、それを問題化する形で用いられていた。これに対し、事例(13)における正和の理由疑問文(23行目)は、01、02行目のやりとりですでに明示的に言及されていた、「職場から非常に遠い場所に住んでいる」という点そのものを、改めて取り上げて問題化している。

しかしながら、本事例は、先行事例とまったく異なるわけではない。事例(13)においても、会話参加者は、ある出来事の不思議さや理解しにくさを共有しながら、それに対する十分に納得のいく説明や見通しを見いだせない状況に置かれている。正和と日野は、先生がどのようにしてその遠距離を通っていたのかについて、乗り換えの有無や車利用の可能性、駐車場所の問題など、複数の推測を提示し、それぞれの合理性を検討している。しかし、18行目以降では、正和が車利用という推測の合理性に疑問を示し、それに対して日野が学校に車を止めるという可能性を挙げてその合理性を一時的に擁護する(20行目)が、直後に日野自身がその推測を「だ(h)め(h)か(h)」と撤回し(22行目)、この後やりとりに滞りが起きる可能性が生じる。

このように、事例(13)では、先行話題が明確に終結したわけではないものの、話題が滞り、これ以上同じ観点から議論を続けても前に進まない恐れがある局面に達している。そのような環境の中で正和が選択したのが、23行目の理由疑問文による発話である。この理由疑問文は、これまで行われていた「どのように通っていたのか」という手段や方法をめぐる推測から、「そもそもなぜそんな遠い場所から来ていたのか」という側面へと、議論の焦点を切り替えている。この焦点の切り替えによって、25行目以降、会話は滞りを脱し、日野による説明(公文の先生になる過程や教室開設の仕組み)へと展開していく。すなわち、この理由疑問文は、今までの話題を断ち切るのではなく、同じ出来事を別の観点から捉え直すことで、議論を前に進める働きをしている。

以上より、事例(13)は、理由疑問文が、参加者が納得のいく見通しを得られておらず、話題が滞りに陥りうる状況においても、相互行為を前進させる資源として用いられることを示している点で重要である。先行事例(10)、(11)、(12)と同様に、この事例においても、理由疑問文は、議論の焦点を切り替えることによって会話を「転がす」働きを果たしている。ただし、本事例では、その切り替えが、話題の明確な切れ目ではなく、話題の滞りが見込まれる中で生じている点に特徴がある。

## 5. 考察

本章では、第4章の分析結果を考察する。特に、①理由疑問文がなぜ話題の切れ目において会話を前進させるために用いられることができるのか、②その用法に応じて発話フォーマットが体系的に分布しているのはなぜか、③これらの分析結果が従来の理由疑問文の機能の捉え方にどのような意味を持つのか、という三点に焦点を当てる。

まず、なぜ理由疑問文が話題の切れ目において会話を前進させる資源として用いられることが可能なのかを考察する。第4章で検討した事例から、理由疑問文は、相手から新しい話題を差し出された場面、あるいは、相互行為上の積み残しがあったまま話題が終わっている場面において、会話を前進させるための資源として繰り返し用いられていることが示された。これは、理由を問うことが、開かれた説明空間を含んでいる点が関わっていると考えられる。この点を理解する手がかりとして、Tinbergen (1963) が提唱した「4つのなぜ」の議論が示唆的である。Tinbergen (1963) は、動物の行動を理解するためには、機能・進化・発達・至近要因という異なる水準からの説明がいずれも必要であると述べた。これは言い換えれば、一つの出来事や行動には、少なくともこれら複数の水準において理由となり得る側面が存在しており、それぞれについて語ることが可能であるということでもある。すなわち、ある出来事の原因を問うことは、単一の正解を求めるのではなく、どの水準からその出来事を捉え、どの側面を理由として取り上げるのかを開いたままにすることである。この点は、日常会話における理由疑問文の性質を考える上でも重要である。理由疑問文は、時間や場所、人物といった特定の次元の情報を指定して求める問い（例えば、「いつ?」「どこ?」「だれ?」のような疑問詞疑問文）とは異なり、受け手に対して、どの観点から出来事を説明するかを比較的自由に委ねる<sup>16</sup>。そのため、受け手は、自身が語りやすい側面や、その場で関連づけやすい経験や判断を理由として提示することができる。本研究で扱った事例においても、相手が新たに持ち出した話題に対して理由疑問文が用いられる場合（4.1節）には、この性質が、出来事を一方向に限定せずに詳細な展開を引き出す働きを支えていた。一方、新たな話題を開始する側として理由疑問文が用いられる場合（4.2節）には、新しい話題を立ち上げるためには、話題を導入する側にとって、どのようなことを聞いてもいいというわけではなく、その話題がある程度継続可能であることが重要になると考えられる<sup>17</sup>。

---

<sup>16</sup> 特に事例（6）を思い出してほしい。准が周りに真面目だねと言われることが嫌だった理由を説明する際、母は、「先のこと」「親の目」、「守られてる部分」など、複数の要因を持ち出し、多角的に理由づけを行っている。

<sup>17</sup> 質問で新しい話題を開始し、その受け手にさらに展開してもらおうやり方について、例えば、Button and Casey (1985) が挙げている、“How’s your foot?” のような「アイテム化されたニュース質問 (itemized news inquiry) 」も、Schegloff (2007) が挙げている “Hey do you see v- (0.3) fat ol’

この点で、理由疑問文は、受け手が自身にとって答えやすい水準を選択できる問いであるため、新たな話題を開始する方法として用いやすい。すなわち、理由疑問文は、受け手の応答可能性の幅を広く確保することによって、話題管理という相互行為的課題と高い親和性をもつ資源であると考えられる。

次に、本研究で扱った事例において、発話フォーマットが体系的に分布していることについて考察する。本研究で扱った理由疑問文には、発話フォーマットの点でかなり明確な使用傾向が見られた。相手が端的に示した新しい話題に対し、聞き手としてその出来事の詳細な展開を要請する実践では、「なんで？」単体の理由疑問文が用いられていた。一方、相互行為上の積み残しがあったまま話題の境界が形成された場面において、直前の話題と関連づけながら新たな話題へと移行する実践では、「なんで+命題内容」のフォーマットが用いられていた。このような分布は偶然的なものではなく、発話フォーマットが特定の相互行為的課題に結びついて用いられていることを示していると考えられる。相互行為言語学の立場では、文法はあらかじめ固定された意味や機能を備えた抽象的な体系として存在するのではなく、人々が相互行為の中で繰り返し用いてきた実践が堆積したものとして捉えられる (Schegloff, 1996; Fox and Thompson, 2010; Couper-Kuhlen et al., 2024)。この観点からすると、理由疑問文の2つの発話フォーマットも、それぞれが最初から異なる働きを持っているのではなく、異なる相互行為的課題に対して適応的に用いられてきた結果として、現在の使用傾向が形成されていると考えられる。「なんで？」による理由疑問文は、具体的に先行発話のどの部分について理由を聞いているのかを明らかにせず、先行発話のどの側面について説明するかを相手の理解に委ねる。そのため、相手を話題上の語り手として位置づけ、出来事について多角的に語る余地を広く確保することができる。この点は、相手が持ち出した話題に対して、聞き手としてさらなる詳細な展開を引き出すという相互行為的課題に適している。一方、「なんで+命題内容？」というフォーマットは、理由を問う対象を命題として明示する点が特徴的である。「なんで？」が単独で用いられた場合、聞き手は先行発話で明示された内容そのものの理由を問われていると理解しやすい一方で、「なんで+命題内容？」というフォーマットでは、先行発話と関連しつつも、その中では公然化されていなかった側面を明示的に取り出して問題化することが可能になる。その結果、このフォーマットは、話題が終結可能な位置に至った場面において、先行する話題から完全に切断することなく、新たな話題へと移行するという相互行為的課題に適応していると考えられる。つまり、本研究で見られた発話フォーマットの体系的分布は、文法形式があらかじめ特

---

Vivian anymouh”のような、極性疑問文による「話題提供 (topic proffering)」も、受け手が知識を持っていることに言及することが重要であると指摘されている。

定の行為を担うものとして存在していることを示すのではなく、異なる相互行為的課題に対して有効であった実践が、形式として定着してきた結果を反映している。

最後に、本研究の結果を踏まえ、理由疑問文の捉え方について考察する。前述のように、先行研究では、理由疑問文の機能として、「説明要求」と「合理性への疑い」といった2つの側面が指摘されてきたが、これらを理由疑問文に内在する固定的な機能として区別するだけでは、実際の会話の中でそれがどのように用いられているのかを十分に捉えることは難しい。本研究が示したのは、理由疑問文が、単に情報を引き出したり相手の行為を批判したりするための形式だけではなく、会話参加者が話題管理に関わる相互行為上の課題に対処する際、会話を前に進めるために用いる相互行為的な資源でもあるという点である。理由疑問文は、話題をそのまま掘り下げてもらうことも、直前の話題との関連性を保ちながら新たな話題へと移行することも可能にする。しかも、具体的にどのような相互行為上の課題に対処しているのかに応じて、発話のフォーマットが調整されている。このように見ると、理由疑問文に、「説明要求」や「合理性への疑い」といった機能が、あらかじめ備わっているというよりも、理由疑問文の意味が、発話が産出される相互行為の中で、その都度参加者の応答やその後の展開を通して、具体化される。そして本研究の事例では、理由疑問文は、相手の新たな話題に対して詳細な展開を促したり（4.1 節）、先行話題との連続性を保ちながら新たな焦点を立てて話題移行を可能にしたりする（4.2 節）という形で、会話の次の進行を組織する資源として用いられていた。したがって本研究は、理由疑問文を「機能」だけで分類するのではなく、特定の相互行為環境において、特定の相互行為実践を可能にする資源として記述する必要性を示したと言える。

## 6. おわりに

### 6.1. 本研究のまとめ

本研究は、日本語日常会話において理由疑問文がどのような相互行為実践の中で用いられているのかを明らかにすることを目的とした。先行研究では、理由疑問文は主に「説明要求」や「合理性への疑い」といった2つの機能の観点から論じられてきたが、これらの機能をあらかじめ切り分け、理由疑問文の機能をそれらだけに想定しては、実際の会話の中で人々が理由疑問文を用いて何をしているのかを十分に捉えることは難しい。本研究ではこの点を踏まえ、会話分析の立場から、理由疑問文が産出される相互行為環境に着目し、それが具体的にどのような相互行為的実践に用いられているのかを記述した。

分析の結果、理由疑問文は、話題の切れ目において、会話を前進させるための相互行為的実践に用いられていることが明らかになった。具体的には、①相手が新たに持ち出した話題に対し、その出来事についての詳細な展開を要請する実践と、②直前の話題との関連を保ちながら、自然に話題を移行させる実践という、二つの用法が確認された。

また、本研究では、これら二つの実践において、理由疑問文の発話フォーマットが体系的に分布していることも示した。相手の話題の詳細な展開を要請する場面では「なんで？」単体の理由疑問文が用いられ、一方で、新たな話題へと移行する場面では「なんで+命題内容？」というフォーマットが用いられていた。このことは、理由疑問文の形式があらかじめ固定的な機能を持つのではなく、相互行為上の課題に応じて調整され、特定の実践に適応してきたものであることを示唆している。

さらに、本研究の意義は、理由疑問文という一つの言語形式を、固定的な意味・機能の対応関係からではなく、特定の相互行為環境において、特定の相互行為上の課題に対処するために使われているという観点から記述した点にある。これは、言語形式を相互行為の中で捉えるという相互行為言語学の基本的立場に立脚した、発話フォーマット研究の一つのケーススタディとして位置づけることができる。本研究が示したように、「なんで？」単体の形式と「なんで+命題内容？」の形式という発話フォーマットの違いは、単なる言い換えや省略ではなく、それぞれが特定の相互行為環境に応じて体系的に使い分けられている。これは、言語形式と機能の関係が、抽象的・事前的に決まるものではなく、参与者の実践の中で立ち上がってくることを具体的に示すものである。この点で本研究は、日本語における理由疑問文の記述を、意味・機能の対応づけにとどまらず、相互行為的実践という観点から更新する試みである。同時に、言語形式の意味と文脈の関係を記述する語用論的研究に対しても、会話分析的アプローチの有効性を示す一例を提供するものと言える。

## 6.2. 今後の課題

本研究には、いくつかの課題が残されている。

第一に、本研究で扱った事例は、日本語日常会話の中でも二者会話に限定して収集されたものであるという点である。二者会話は参与者間の相互行為を比較的明確に観察できる一方で、多人数会話においては、話題の切れ目や発話の受け手がより曖昧になり、理由疑問文の働きも異なる形で現れる可能性がある。今後は、多人数会話のデータも含めることで、理由疑問文がどのように話題管理に関与しているのかを、より広い範囲で検討する必要がある。

第二に、本研究では、話題の切れ目において理由疑問文が会話を前に進める実践に注目したが、同様の相互行為環境において、理由疑問文以外の言語資源が用いられる場合との詳細な比較を行うことができなかった。例えば、「うそ」「まじ」「ほんと」といった反応も、会話を停滞させずに次の展開を導く資源となりうる。今後は、これらの資源との詳細な比較を通して、理由疑問文が持つ特徴を、より詳細に位置づけることが求められる。

第三に、本研究で詳細に分析した事例の数には限りがあるという点が挙げられる。本研究では、理由疑問文がどのような相互行為実践の中で用いられているのかを明らかにすることを目的としたため、事例の収集段階では、理由疑問文を含む事例を広く集め、最後は30例を対象として検討を行った。その上で、相互行為環境に着目して事例を整理・比較した結果、話題の切れ目において理由疑問文が用いられる二つの実践が浮かび上がり、最終的に本稿ではそれらの事例を中心に分析を行うこととなった。今後は、同じ相互行為環境における事例をさらに蓄積し、本研究で記述した実践がどの程度安定して観察されるのか、またどのようなバリエーションが見られるのかを検討していく必要がある。

さらに、本研究は理由疑問文の、話題の切れ目における話題管理の用法に焦点を当てているが、事例のグルーピングの過程では、話題の切れ目とは異なる相互行為環境において理由疑問文が用いられる例も確認された。例えば、隣接ペアの第二の位置の前に、理由疑問文が産出される事例などが見られたが、明確な分析が可能な事例を十分に確保できなかったため、本研究では議論の対象から除外した。今後は、このような環境における理由疑問文の用法についても事例を蓄積し、検討していくことが課題である。

## 参考文献

- Bolden, G. B. and Robinson, J.D. 2011. "Soliciting Accounts With Why-Interrogatives in Conversation." *Journal of Communication* 61(1), 94-119.
- Button, G. and N. Casey. 1985. "Topic Nomination and Topic Pursuit" *Human Studies* 9, 3-55.
- Couper-Kuhlen, E. 2014. "What Does Grammar Tell Us About Action?" *Pragmatics*, 24(3), 623-647.
- Curl, T. S. and P. Drew. 2008. "Contingency and Action: A Comparison of Two Forms of Requesting." *Research on Language and Social Interaction* 41(2), 129-153.
- Couper-Kuhlen, E., Fox, B. A., Raymond, C. W., Sorjonen, M. L. and Thompson, S. A. 2024. "Analyzing Grammar in Social Interaction." In J. D. Robinson, R. Clift, K. H. Kendrick, and C. W. Raymond (eds.), *The Cambridge Handbook of Methods in Conversation Analysis*, 633-663. Cambridge: Cambridge University Press.
- Couper-Kuhlen, E. and M. Selting. 2018. *Interactional Linguistics: Studying Language in Social Interaction*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Fox, B. A. and Thompson, S. A. 2010. "Responses to wh-questions in English Conversation." *Research on Language and Social Interaction* 43(2), 133-156.
- Fox, B. A., S. A. Thompson, C. E. Ford and Couper-Kuhlen, E. 2013. "Conversation Analysis and Linguistics." In J. Sidnell and T. Stivers (eds.), *The Handbook of Conversation Analysis*, 726-740. Oxford: Wiley-Blackwell.
- Hayashi, M. 2001. "Postposition-Initiated Utterances in Japanese Conversation: An Interactional Account of a Grammatical Practice." In Selting, M. and Couper-Kuhlen, E. (eds.), *Studies in Interactional Linguistics*, 317-343. Amsterdam: John Benjamins.
- 平本毅. 2011. 「話題アイテムの掘み出し」『現代社会学理論研究』5, 101-119.
- Jefferson, G. 2004. "Glossary of Transcript Symbols with an Introduction." In G. Lerner (ed.), *Conversation Analysis: Studies from the First Generation*, 13-31. Amsterdam: John Benjamins.
- 加藤重広. 2015. 「発話的な効力と発話内的な効力—日本語の疑問形式を出発点に—」加藤重広（編）『日本語語用論フォーラム 1』27-56. 東京：ひつじ書房.
- 小磯花絵・天谷晴香・居關友里子・白田泰如・柏野和佳子・川端良子・田中弥生・伝康

- 晴・西川賢哉・渡邊友香. 2023. 「『日本語日常会話コーパス』設計と特徴」『国立国語研究所論集』24, 153-168.
- 串田秀也. 2006. 『相互行為秩序と会話分析―「話し手」と「共-成員性」をめぐる参加の組織化―』京都：世界思想社.
- 串田秀也・平本毅・林誠. 2017. 『会話分析入門』東京：勁草書房.
- 馬穎瑞. 2017. 「日本語疑問文の統語語用論的研究」北海道大学文学研究科博士論文.
- Maynard, D. 1980. "Placement of Topic Changes in Conversation." *Semiotica* 30, 263-90.
- McLaughlin, M. L., Cody, M. J. and O'Hair, H. D. 1983. "The Management of Failure Events: Some Contextual Determinants of Accounting Behavior." *Human Communication Research* 9, 208-224.
- Mori, J. 2006. "The Workings of the Japanese Token hee in Informing Sequence s: An Analysis of Sequential Context, Turn Shape, and Prosody." *Journal of Pragmatics* 38(8), 1175-1205.
- Pomerantz, A. 1980. "Telling My Side: 'Limited Access' as a 'Fishing' Device." *Sociological inquiry* 50(3-4), 186-198.
- Pomerantz, A. 1984. "Agreeing and Disagreeing with Assessments: Some Features of Preferred/Dispreferred Turn Shapes." In J. M. Atkinson and J. Heritage (eds.), *Structures of Social Action: Studies in Conversation Analysis*, 57-101. Cambridge: Cambridge University Press.
- Pomerantz, A. 1988. "Offering a Candidate Answer: An Information Seeking Strategy." *Communications Monographs* 55(4), 360-373.
- Raymond, C. W. and Stivers, T. 2016. "The Omnirelevance of Accountability: Off-Record Account Solicitations." In Robinson, Jeffrey D. (ed.), *Accountability in Social Interaction*, 321-353. New York: Oxford University Press.
- Robinson, J. D. and Bolden, G. B. 2010. "Preference Organization of Sequence-Initiating Actions: The Case of Explicit Account Solicitations." *Discourse Studies* 12(4), 501-533.
- Sacks, H. 1984. "Notes on Methodology." In M. Atkinson (ed.), *Structures of Social Action: Studies in Conversation Analysis*, 21-27. Cambridge: Cambridge University Press.
- Schegloff, E. A. 1988. "Goffman and the Analysis of Conversation." In P. Drew and A. Wootton (eds.), *Erving Goffman: Exploring the Interaction Order*,

- 89-135. Cambridge: Polity Press.
- Schegloff, E. A. 1996. "Turn organization: One Intersection of Grammar and Interaction." In Orchs, E., E. A. Schegloff and S. A. Thompson (eds.), *Interaction and Grammar*, 52-133. Cambridge: Cambridge University Press.
- Schegloff, E. A. 2007. *Sequence Organization in Interaction: A Primer in Conversation Analysis*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Schegloff, E. A. and Sacks, H. 1973. "Opening up Closings." *Semiotica* 8(4), 289-327.
- Scott, M. B. and Lyman, S. M. 1968. "Accounts." *American Sociological Review* 33, 46-62.
- Smith, M. S. 2013. "'I thought' Initiated Turns: Addressing Discrepancies in First-Hand and Second-Hand Knowledge." *Journal of Pragmatics* 57, 318-330.
- Stivers, T. 2010. "An Overview of the Question-Response System in American English Conversation." *Journal of Pragmatics* 42(10), 2772-2781.
- Tanaka, H. 2015. "Action-Projection in Japanese conversation: Topic Particles *wa*, *mo*, and *tte* for Triggering Categorization Activities." *Frontiers in psychology* 6, 1113.
- Tinbergen, N. 1963. "On Aims and Methods in Ethology." *Zeitschrift für Tierpsychologie* 20: 410-433.
- 楊凱榮. 2023. 「疑問を表さない日本語の「疑問詞＋動詞基本形＋の」」『専修大学国際コミュニケーション研究』2, 58-70.
- 横森大輔. 2017. 「認識的スタンスの表示と相互行為プラクティス：「やっぱり」が付与された極性質問発話を中心に」 鈴木亮子・秦かおり・横森大輔（編）『話しことばへのアプローチ：創発的・学際的談話研究への新たな挑戦』113-143. 東京：ひつじ書房.
- 横森大輔. 2018 「会話分析から言語研究への広がり——相互行為言語学の展開」平本毅・横森大輔・増田将伸・戸江哲理・城綾実（編）『会話分析の広がり』63-96. 東京：ひつじ書房.
- Yokomori, D. and Endo, T. 2022. "Projective/Retrospective Linking of a Contrastive Idea: Interactional Practices of Turn-Initial and Turn-Final Uses of *ke do* 'but' in Japanese." *Journal of Pragmatics* 196, 24-43.

## 付録 本文中で用いたデータ転記記号

本研究の書き起こし記号は、Jefferson (2004)、串田・平本・林 (2017) に基づいている。

|           |                                                              |
|-----------|--------------------------------------------------------------|
| [文字       | この記号を付けた複数行の発話が重なり始めた位置。                                     |
| 文字]       | この記号を付けた複数行の発話が重なりが解消された位置。                                  |
| =文字       | 前後の発話が切れ目なく続いている。または、行末にこの記号がある行から行頭にこの記号がある行へと間髪を入れずに続いている。 |
| (数字)      | 沈黙の秒数。                                                       |
| (.)       | ごく短い沈黙。およそ 0.1 秒程度。                                          |
| 文字::      | 直前の音が延びている。「:」の数が多いほど長く延びている。                                |
| 文字-       | 直前の語や発話が中断されている。                                             |
| 文字.       | 尻下がりの抑揚。                                                     |
| 文字?       | 尻上がりの抑揚。                                                     |
| 文字&       | やや尻上がりの抑揚。                                                   |
| 文字,       | まだ発話が続くように聞こえる抑揚。                                            |
| 文字!       | 声が弾んでいる。                                                     |
| ↑文字       | 直後の音が高くなっている。                                                |
| ↓文字       | 直後の音が低くなっている。                                                |
| <u>文字</u> | 強く発話されている。                                                   |
| °文字°      | 弱く発話されている。                                                   |
| hh        | 息を吐く音。h の数が多いほど長い。笑いの場合もある。                                  |
| 文(h)字     | 笑いながら発話している。                                                 |
| \$文字\$    | 笑っているような声の調子で発話している。                                         |
| <文字>      | ゆっくり発話されている。                                                 |
| >文字<      | 速く発話されている。                                                   |
| (文字)      | はっきり聞き取れない部分。                                                |
| ( )       | まったく聞き取れない部分。                                                |
| ((文字))    | データについての様々の説明。                                               |
| <b>文字</b> | 分析において注目する発話。                                                |

## 謝辞

本論文の執筆にあたり、多くの方々からご指導とご支援を賜りました。ここに記してお礼を申し上げます。

まず、指導教員である横森大輔先生には、いつもご丁寧なご指導をいただきました。分析の進め方など、すべての面において具体的な助言を重ねていただいたことで、研究の作業を進めることができました。また、折に触れて温かい励ましのお言葉をいただいたことは、研究の進捗が停滞していた時期にも取り組みを続ける大きな支えとなりました。ここに深く感謝申し上げます。副査の谷口一美先生、Jason Ginsburg 先生には、公聴会等の場において、詳細なコメントや示唆に富むご質問をいただきました。先生方のご指摘を踏まえることで、自身では十分に検討できていなかった分析上の論点を再考し、議論をより明確化することができました。心より御礼申し上げます。また、守田貴弘先生には、中間発表等の際にコメントやご質問をいただき、自身の研究内容を見直し、議論を深めることができました。修士課程を通して、院生室の利用をはじめ、研究環境の整備において多大なご配慮もいただき、日々の研究活動を支えていただきました。厚く御礼申し上げます。

さらに、学外においても学びの機会を多くいただきました。京都会話分析合同ゼミでは、先生方および参加された学生の皆様から有益なご意見やコメントを頂戴し、異なる視点からデータを見直す契機となりました。会話分析研究会の月例データセッションを通して、分析手法への理解を深めることができました。また、第 11 回会話分析初級者セミナーにおいては、串田秀也先生、城綾実先生、戸江哲理先生、林誠先生、平本毅先生、増田将伸先生、横森大輔先生より、会話における連鎖組織について講義を賜り、会話分析の手法をどのように実際のデータ分析に使うべきなのかについて理解を深めることができました。さらに、同志社大学の杉浦秀行先生が設けられた会話分析の講義にも参加させていただきました。講義では、これまで十分に触れてこなかった教科書の内容について、常に丁寧かつ分かりやすく解説していただき、会話分析の手法についての理解を深め、視野を広げることができました。

横森研究室のゼミメンバーの皆様には、ゼミでの発表や日常的な話し合いを通して、多くの示唆や建設的なコメントをいただき、自身の分析の妥当性を検討しながら研究を進めることができました。また、日々の研究生活の中で温かい励ましをいただいたことにも、心より感謝申し上げます。

皆様の支えがなければ、本研究をここまでまとめることはできませんでした。ここに改めて、心より感謝申し上げます。

会話における理由疑問文の形式と行為…話題管理への相互行為言語学的アプローチ

李思萌